2007年度 豊橋市民大学トラム 愛知大学連携講座（5回）

東亜同文書院生とキリスト教

東亜同文書院大学記念センター
リサーチアシスタント　石田卓生

【司会】 市民大学トラムにお越しくださいましてありがとうございます。それでは、はじめさせていただきます。本日の第5回講座は、本学東亜同文書院大学記念センターの石田卓生先生にご講演をしていただきます。石田先生は本学東亜同文書院大学記念センターのリサーチ・アシスタントとして書院に関わる研究をされています。本日は「東亜同文書院生とキリスト教」と題しまして、書院でのキリスト教活動という、これまで注目されてこなかった事柄についお話していただきます。それでは先生よろしくお願いいたします。

1．はじめに

【石田】 石田です。今日はよろしくお願いします。今回で市民大学トラムも第5回目となりまして、みなさんはすでに東亜同文書院について幅広い知識をお持ちと思いますが、今回は「東亜同文書院生とキリスト教」という、これまでの講座にくらべると少々奇抜な感じの題名ですすめさせていただきます。

最初にお断りしておかなければならないのは、題名に「キリスト教」とあげてありますが、わたし自身はいわゆる「御東さん」でして、キリスト教とはまったく関係ありません。ですから、今回の話は、キリスト教の宗教的な面に関してふれるものではなく、東亜同文書院をめぐるキリスト教についての歴史的な事実を紹介していくものになります。

まず、この写真（写真1）を御覧下さい。これ

写真1　徐家匯虹橋路校舎

は東亜同文書院の校舎です。この学校は戦災で度々移転を余儀なくされているのですが、この写真は徐家匯虹橋路校舎といわれているもので、一番長いあいだ東亜同文書院がおかれていたものです。

校舎手前に写っているのは桜です。当時、上海にはたくさんの日本人が住んでいましたから、桜が植えられている場所もありました。たとえば、さきほど「御東さん」といいましたが、「東」ではなく「西」の方、大谷探検隊で有名な大谷光瑞の上海の邸宅「無憂園」、アショーカ王（阿育王）というインドの仏教を庇護した王様の名前からとって「Villa　Asoka」ともいいましたが、この庭園にも桜が植えられていたそうです。ほかにも「六三花園」などの料亭経営の庭園にも桜の樹

があり、上海在住日本人に親しまれていたそうです。それらとくらべると、東亜同文書院の桜はささやかな規模だっとは思いますが、この写真のようになかなかきれいですから、日本人にとって上海にあっても日本の故郷をおもわせるような親しみある存在だったのかもしれません。

2. 東亜同文書院について

さて、東亜同文書院とキリスト教とのかかわりについて話をすすめていく前に、これまでの講座のおさらいになりますが、東亜同文書院について簡単にまとめておきたいと思います。

この写真（写真2）は近衛篤麿です。有名な近衛文麿の父親です。息子は細面ですが、父親の方はなかなか恰幅がよいですね。この篤麿が会長を務めていた東亜同文会が1901年5月、上海に開いたのが東亜同文書院でした。注目すべきは、開校に際して中国側の協力をうけていたことです。特に張之洞と劉坤一という有力な政治家の支持をうけていました。この時代の中国の政治家というと李鴻章がとても有名ですが、日清戦争後、かれの権勢は往年とくらべれば衰えていました。日清戦争で実際に日本と戦ったのは、現在の感覚でいう国家の軍隊ではなく、いわば李鴻章個人のものだったといえますから、日本軍に自分の軍隊を打ちのめされてしまったために力が衰えていたのです。そんな状況でしたから、日清戦争に直接参加していなかった張之洞や劉坤一の勢力は、その当時の中国を代表するものだっといえます。そのような二人の支持協力を得て、近衛篤麿率いる東亜同文会は中国国内に東亜同文書院をつくったのです。

写真2　近衛篤麿

ここで、東亜同文書院開校は、ただ単に日本人が上海に学校をつくったという単純な話ではなく、中国側に認められ支持された活動であった、このことを強調しておきたいと思います。

3. 東亜同文書院の教育

3.1. 教育方針

では、東亜同文書院では、どういった教育がなされていたのでしょうか。

当時の欧米優位の世界情勢を、東亜同文会会長近衛篤麿は、自身のヨーロッパ留学経験などを通して肌身で感じとっていました。そこで、日本を含めたアジアの人々が欧米の勢力に飲み込まれないようにするには、日本と中国が提携しながら発展していかなければならないと考えたのです。そして、これを実際に担う人材を養成しようとしたのです。

その頃の日本には四書五経や中国古典文学に通じた人物などたくさんいましたが、現実の中国を知っている人物はけっして多くはありませんでした。『論語』を訓読することはできるけれど、同時代の中国人が普段どんな言葉をしゃべっているのか、そういうことがよくわからないのです。これでは手を携えることなどできるわけがありません。そのような状況をふまえて、東亜同文会は、日本人が中国に行って実際の中国で生活して学び、さらに中国人も日本に来て日本を知ってもらおう、そうして互いを知り理解しあった上で提携していこうとしたのです。前者が上海の東亜同文書院、後者が東京同文書院です。そして、そこで日中の青年へ教育活動が行われたのです。

この時、上海の東亜同文書院を実際に運営した人々のなかには、日清貿易研究所の教職員だった人や卒業生が多数ふくまれていました。この研究所は、日清戦争の前に上海にあったもので、名古屋生まれの荒尾精という陸軍出の人物がつくった商業専門の学校です。研究所自体は、日清戦争前夜のゴタゴタの中で閉鎖され、荒尾もはやくに

亡くなっていましたが、その関係者たちは中国についての知識と経験をもつ人材として、東亜同文会に多数が参加しており、東亜同文書院の活動を担うことになったのです。そのため、東亜同文書院の授業内容は商業学校であった日清貿易研究所と近いものとなっています。

3.2. 中国語教育・中国語教科書『華語萃編』

東亜同文書院の教育で特徴的だったのもののひとつに中国語教育があります。学内では『華語萃編』という独自に編んだ教科書が使われました。「カゴスイヘン」と読みます。「華語」というのは中国語のことです。「萃編」というのは選りすぐったもの、アンソロジーということです。中国語の美しい言葉を集めたのですよ、という教科書にしてはとても風流な名前です。

中国語の教科書というのは、戦前の日本にもたくさんあったのですが、そうしたもののなかで『華語萃編』は独特な性格をもつものでした。その頃の中国語の教科書というのは、基本的には中国語に秀でた人物がつくものでした。たとえば、宮島大八の『急就篇』のようにです。それに対して『華語萃編』は、日本人教師と中国人教師が相談しながらつくりあげ、さらに実際の授業での経験をふまえて何度も改良されつづけたのです。現在、『華語萃編』への評価は必ずしも高いものではないのですが、このような点に注目するならば、今後より積極的に評価されることになるものだと思います。

3.3.「大旅行」と「書院精神」

さらに、藤田佳久先生の御講演の中でも出てきました「大旅行」も、東亜同文書院の教育を特徴づけるもののひとつです。学生だけで中国各地を調査旅行したもので、今でいうところフィールドワークです。今回はその写真から旅行の実際の様子をみていきましょう。

御覧いただいている写真（写真3）が「大旅行」

写真3 「大旅行」山西省太原城外の景（1908年頃）

のものです。100年ほど前のものになります。これは山西省太原で撮られたもので、馬に乗っているのが東亜同文書院生たちです。このように、ときには現地の人々と交渉しキャラバンを組織して調査をしました。

次の写真（写真4）は、東亜同文書院から「大旅行」

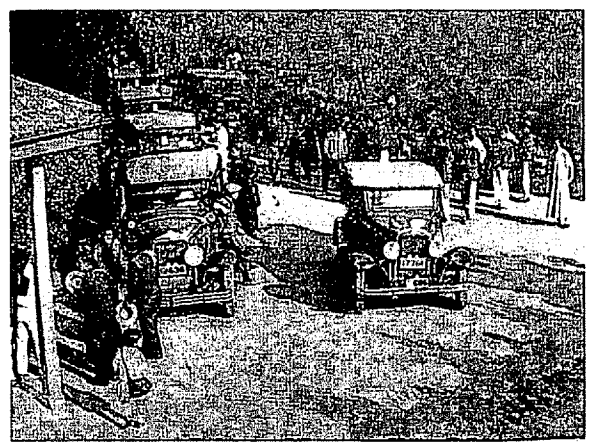


写真4 第30期生「大旅行」出発

へと出発する際の様子です。この時は学校が奮発してハイヤーをよび、上海駅や港に学生を送っていく、そこから先は学生のみ自力で旅行をしていくのです。

さきほどのハイヤーと落差が激しいですが、この写真（写真5）は山東省での学生たちです。崩れかかった廃屋の前で何を調査しているのかと思われるかもしれませんが、実は後ろに見えているのは旅館です。かれらは、ここに泊まらなければいけないのです。学生たちの回想録を読むと、旅

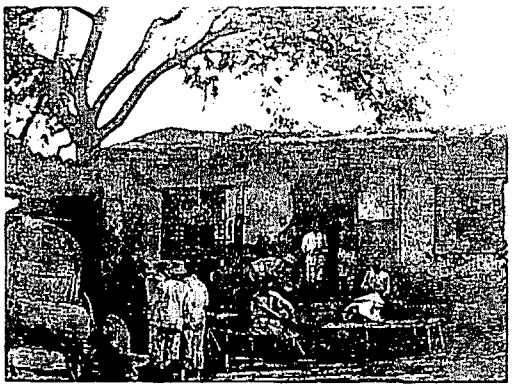


写真５「大旅行」山東省平原県の旅宿（1908 年頃）

先の宿で南京虫に食われて寝られなかったというのがよく出てくるのですが、実際に泊まるのはこういう、わたしたちがイメージするような旅館とはかけはなれたものだったわけですから、旅行というより冒険といっていいようなものだったようです。

学生たちはただ漠然と旅行をしていたわけではありません。旅した地方の経済状況とか、文化や社会を調査することを目的としていたました。この写真（写真６）は、旅先の広東での写真です。店先で現地調査についてまとめているのでしょう。

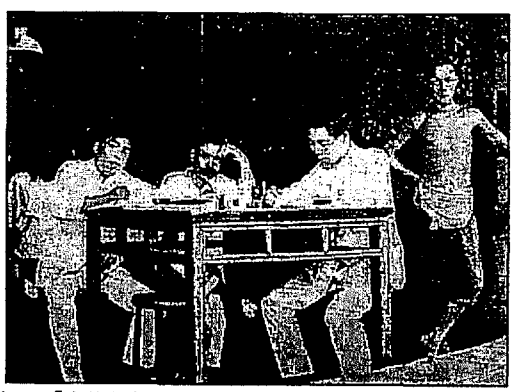


写真６「大旅行」広東潮州の客桟（報告書執筆する書院生）

こうした地道な調査は卒業論文としてまとめられたのですが、これは『支那調査報告書』というもので、当時の中国を知るための貴重な資料として愛知大学に残っています。

「大旅行」について、もう少し写真をみていただきましょう。ハイヤーで出発した後２、３カ月も旅をつづけると、最後にはこの写真（写真７）

写真７「大旅行」民船上の水浴

のような様子になってしまいます。裸で背中を流しあっているのが学生たちです。現地の人と見分けがつかないほど、白黒の写真でみても黒々と日焼けしているのがわかります。これは雲南省での写真（写真８）ですが、かなりの山奥のようにみえます。さきほどの広東のような都会にも行けば、このような山深い場所にまで調査に行っていたのですね。

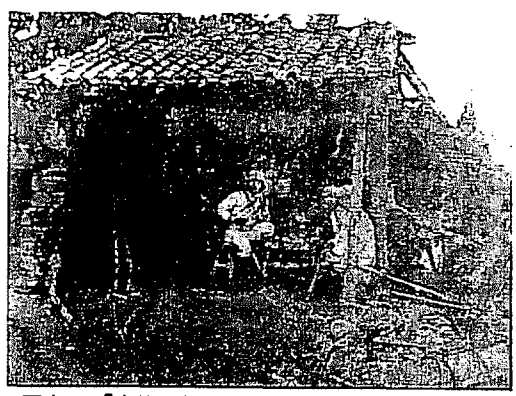


写真８「大旅行」雲南山中の掛茶屋（1908 年頃）

御覧いただいた写真で「大旅行」の実際の様子がご理解いただけると思います。このように東亜同文書院の学生たちは、自分の脚で中国のすみずみまで入っていったのです。

また、東亜同文書院について忘れてはいけないのは、同窓間に「書院精神（しょいんせいしん）」あるいは「根津精神（ねづせいしん）」ともいわれるものがあったことです。早稲田大学のバンカラな気風などと同じものなのかといえば、それとはかなり異なったもので、精神的な結びつきのことをさすもののようです。東亜同文

書院は、3年制時代は全校学生250～300名ほどと規模がさほど大きくなかったということもありますし、全寮制で3年間、後には4年間も一緒に暮らすわけですから、卒業したあとも連帯感が強かったのでしょう。

4. 東亜同文書院周辺のキリスト教

4.1. 日本のキリスト教とのかかわり

さて、御覧いただいた写真や紹介してきた東亜同文書院には、キリスト教とのかかわりをうかがわせるようなものはなにもありませんでした。では、どうしてわたしが東亜同文書院とキリスト教について注目するかというと、この学校に関する事柄をよく注意してみかえしてみるとき、これまで見過ごされてきたキリスト教に関係する事実がたくさん出てくるからです。

そのひとつに日露戦争時の日本YMCA同盟による慰安活動への協力があります。戦時、日本の兵站基地が、「満洲」つまり現在の中国東北地方の営口(えいこう)におかれており、ここで日本YMCA同盟は全国から募金や物資を集めて慰安活動を行っていました。そして、東亜同文書院の学生たちも上海でお金や物資を募り、その営口の慰問所に送ったと伝わっています。

さらにもうひとつ。これはお手元のハンドアウト1頁目「日本のキリスト教とのかかわり」という項目にあげてありますが、東亜同文書院には、たくさんの日本YMCA同盟関係者がやってきていたのです。キリスト教の関係者が日本の内地から上海にわざわざ来て、東亜同文書院の学生に対して講演を行なっているのです。1906年は日本YMCA同盟主事大塚素(おおつかひろし)、その次は1917年4月に同名誉主事ガレン・フィッシャーと京都YMCA総主事村上正次、翌月にはYMCAではありませんが日本メソジスト教会の監督平岩愃保(ひらいわよしやす)という主に静岡で活動していた有名な牧師さんがやってきて東亜同文書院で講演をしています。学生が中国大陸を歩き回るなど、およそ宗教色など感じさせない学校の学生がキリスト教系の団体であるYMCAの慰問活動に協力したり、キリスト教系人物の講演を校内でもったりするのは不思議ではないでしょうか。

こうした東亜同文書院とキリスト教とのかかわりは、みなさんがこの市民大学トラムで学んできたことのなかにも、よく注意してみると実は見出すことができます。

さきほど、日清貿易研究所とその創立者荒尾精がでてきましたが、この荒尾精を援助していたのが岸田吟香(きしだぎんこう)という人物です。かれはアメリカ人ジェームス・カーティス・ヘボン（James Curtis Hepburn、1815～1911年）について学んでいた時期がありました。ヘボンについては、日本最初の本格的和英辞書『和英語林集成(わえいごりんしゅうせい)』の編纂やキリスト教主義教育をかかげる明治学院（現明治学院大学）の創立者として、もっと身近なところではヘボン式ローマ字の考案者としてしられていますが、実はアメリカの長老会派系の宣教師でした。そして、ヘボンに学んだ岸田自身も、友人の大倉財閥総帥大倉喜八郎(おおくらきはちろう)に、わたしはクリスチャンだと告白したというように、キリスト教信者だったようです。

次に荒尾精と新島襄(にいじまじょう)という人物とのかかわりがあります。新島はキリスト教精神にもとづく教育を志す同志社（現同志社大学）の創立者ですが、どうやら荒尾の知り合いだったらしい。この後にも出てきますが、東亜同文書院の院長になる根津一(ねづはじめ)は荒尾の仲人で結婚しています。この奥さんになった女性は、新島がつくった同志社女子学校出身者で、同校で教壇に立っていたいました。この根津の結婚から、荒尾と新島はなにかしら関係があっただろうと想像できるわけです。荒尾自身がキリスト教についてどういった感想をもっていたのかについてはわかりませんが、さきほどの岸田吟香の例とあわせると、東亜同文書院前史としてとりあげられる日清貿易研究所周辺にもキリスト

教とのかかわりをみることができるのです。

4.2. 山田良政、純三郎兄弟とキリスト教

本市民大学トラムの馬場毅先生の講演でとりあげられ、また本学の東亜同文書院大学記念センターにも多くの関連資料が展示されている山田良政、純三郎兄弟という東亜同文書院にかかわる人物にもキリスト教との関係をみることができます。この二人はキリスト教とのかかわりがとても深いのです。

この中国人と同じような格好をしている写真（写真９）の人物が山田良政、隣は妻の敏子です。結婚して間もなく良政は中国に渡り恵州蜂起（恵州起義）で行方不明となってしまいますから、夫婦としての生活はごくごく短期間しかありませんでした。しかし、敏子は夫の戦死が確認されるまでずっと待ち続け、いよいよ死んだということがわかってはじめて山田家から籍を抜かれたそうです。

写真９　山田良政・敏子夫妻
相沢文蔵『津軽を拓いた人々』（弘前学院、2003年）より

そして、この敏子はキリスト教信者でした。親もキリスト教信者で、彼女は函館のキリスト教系の遺愛学校（現遺愛学院遺愛女子中学校・高等学校）という女学校で学び、後には英語教師になったそうです。後に孫文が日本に来た際には、英語で孫文の通訳をしたとも伝えられています。

では、山田良政の方はどうだったのでしょうか。まず良政とかれの弟である純三郎が学んだ東奥義塾に注目しなければなりません。この学校は、元々は津軽藩の藩校で、たとえば豊橋の時習館や田原の成章館（現愛知県立成章高等学校）と同じような存在でした。一時、運営に行き詰まるのですが、プロテスタント系のメソジスト教会の支援を受けて再興します。この際、大きな役割をはたしたのが山田兄弟の母方の伯父である菊池九郎でした。かれは初代弘前市長を経て衆議院議員となるなど青森県の名士だったのですが、実はキリスト教信者でもあったのです。

さらに、菊池の親友に本多庸一がいます。かれもキリスト教信者で、青山学院大学の礎を築いた人物としてしられています。かれは青山学院で活動する以前に東奥義塾の塾長をしており、ここでキリスト教に基づく教育を行なっていました。この時期に学んだのが山田兄弟です。純三郎は東奥義塾で学んでいる1893年、キリスト教の洗礼をうけたという説もあります。

また、後に恵州蜂起で良政が殺される際、日本人であることを告白すれば助かっただろうものを頑として明かさなかったために処刑されることになったと伝えられることがあるのですが、別の言い伝えのなかには、処刑した側の人物が、日本人であることは気付いていた、しかもキリスト教宣教師だろうと思っていたというものがあります。日本人の宣教師を殺したとなれば大問題になってしまうということで公にしなかったというのです。

では、どうして良政がキリスト教宣教師だと勘違いされたのでしょうか。ある説では宣教師が着るようなシャツを着ていたからなどとも伝えられてもいますが、はっきりとはわかりません。もしかしたら、なにかしらキリスト教との関係をうかがわせる物を持っていたのかもしれません。そもそも良政自身がキリスト教信者であったと伝えられることもありますし、ほかにも実家に弟純三郎を教会に通わせるべきだと手紙と書いたとか、上海で日本人のキリスト教信者を集めてキリスト教の青年会を組織していたという話もありますから、宣教師とはいかないまでも、キリスト教と深いつながりがあるととらえられる点があったとし

ても不思議ではありません。

このように、山田兄弟をみてくると、端々にキリスト教にかかわる形跡を見出すことができるのです。ここで注目しておきたいのが、山田兄弟と関係が深かった孫文とキリスト教の関係です。あまりとりあげられることがないのですが、孫文自身がキリスト教の信者でした。また、映画にもなって有名な宋家三姉妹の一人でもある奥さんの宋慶齢も、父親が宣教師でもあったことからわかるようにやはりキリスト教信者でした。山田兄弟と孫文が民族や国家を超えて交流をもったことを義理人情的な美談としてとらえるむきがありますが、かれらとキリスト教との関係に注目するならば、ここでは同じキリスト教信者であるという精神的なつながりが大きな役割をはたしていた可能性を指摘しておきたいと思います。

5. 東亜同文書院第1期生・キリスト教信者坂本義孝

このように東亜同文書院の周辺にはキリスト教とのかかわりが散見できました。しかし、これはあくまで周辺にすぎないともいえるものです。しかし、東亜同文書院の内部にもキリスト教関係者がでてきます。

なかでもわたしが注目するのが坂本義孝という人物です。かれは東亜同文書院の第1期生でした。後に母校の教授に就任し、さらに学内では中華学生部の部長として対中国人教育を担当することになります。この人は、東亜同文書院の教授陣のなかでもとりわけ国際派でした。東亜同文書院といえば、一般的にはアジア主義とか大アジア主義とか、アジア関係の学校といったイメージがありますが、かれは東亜同文書院を卒業したあとアメリカで15年間生活します。その間、どういったことをしていたかというと、アメリカの大学でさらに勉強をして南カリフォルニア大学の東洋科の教授をしたと伝えられています。そしてそのあと、今でもありますが国際労働機関（ILO）の総会に参加したり、新渡戸稲造と共に日本の代表者として太平洋問題会議に参加したりしています。この会議は、日中戦争開始前後の時期に、なんとか日本と中国が戦争をしないように和平工作をしなければいけないということで、YMCAつまりキリスト教系勢力の支援を受けて行われていた民間の運動です。

この坂本義孝とキリスト教との関係をいえば、かれは熱心なキリスト教の信者でした。東亜同文書院教授在任中には上海日本人YMCAの理事長となっています。そして上海日本人YMCAが経営する外国語学校の校長も務めてもいます。日本の敗戦直前には、上海の「聖約翰大学」の教授に就いていました。漢字が読みにくいかも知れませんけれども、中国語では「Shèng yuehàn Dà xué」と発音します、英名は「St. John's University」、ここではセント・ジョーンズ大学とよんでおきましょう。「聖」が「St.」、「約翰」は「ヨハネ」、英語読みで「ジョン」のことを指します。このセント・ジョーンズ大学はアメリカのプロテスタント系の大学です。このように、かれは東亜同文書院出身で母校の先生となり、しかも国際的な活動をしていた。そして、つねにキリスト教との関係の中で活動していたことがわかります。

これは1925年ぐらいの東亜同文書院のアルバムに出てくる坂本義孝の写真（写真10）です。15年間のアメリカ生活という感じが出ていると思います。きっちりと洋服を着こなしています。1910年ぐらいのアメリカ留学中に結婚時の様子を撮ったとおもわれる写真（写真11）が残っています。隣に見えるのが奥さんな

写真10　坂本義孝

写真 11　坂本義孝夫妻

のでしょう。これらの様子を東亜同文書院の院長である根津一の髭面（写真 12）とくらべるとその弟子とはおもえないほどです。

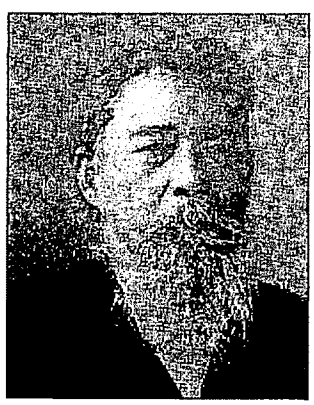


写真 12　根津　一

少々話がそれますけれど、かれの次男坂本義和氏は、平和学で世界的に有名な学者です。また、長男の坂本義行氏は長く東京の商工会議所に勤めていらして、職場の中ではどうやら坂本龍馬の末裔らしいという噂が流れていたそうです。それについて、ご自身は肯定も否定もしなかったそうです。

試しに坂本龍馬の顔とくらべてみましょう。どうでしょうか、あまり似ているようにもみえません。なぜ、こんなことをしてみるのかといえば、坂本龍馬にかかわるキリスト教の話があるからです。かれ自身には子供はいませんでしたが、その名を惜しんだ人々が血縁の男の子を養子として家を継がせます。この龍馬の養子は東京に出て、明治時代の初期には司法機関に務めていいました。そこで何が起こったかというと、かれはキリスト教に改宗してしまうのです。そしてあまりに熱心にキリスト教の運動をするものですから、職場に居づらくなり結局は高知県に戻ってしまったそうです。ほかにも、龍馬の一族には北海道に渡った人たちがいるのですが、かれらはほとんどキリスト教の信者になっています。このように龍馬の血筋にキリスト教信者がいたことを考えると、もしかして坂本義孝とつながるのかもしれないと思いたくもなります。坂本義孝は福島県の出身なのですが、福島に果たして坂本龍馬の関係者が来ていたのかどうか、まったくわかりません。ただ、このように明治期の日本では意外なところにキリスト教がよく出てきます。

6.「書院精神」

6.1. 根津一の教育姿勢

冒頭で、東亜同文書院の特徴として「書院精神」があったことをあげました。坂本義孝のようなキリスト教信者たちが東亜同文書院でどういった活動を行なったのかを考える際には、宗教が人間の精神世界にかかわるものである以上、当然、それを迎える側の東亜同文書院側の精神面での特徴である「書院精神」がどういったものだったのかということをしっかりと把握しておかなければならないでしょう。

次に、この「書院精神」について考えていきましょう。

東亜同文書院は、その実質的な創立者根津一が、45 年にわたる学校の歴史の中で 20 年間近く、つまりほとんど半分ぐらい院長を務めていました。その思想がそのまま「書院精神」や「根津精神」とよばれているものだといわれます。そのかれが影響をうけていたのが、中国の王守仁つまり王陽明の思想です。日本では「陽明学」とよくいわれるものです。しかし、それが一体どんなものかといわれても、これはなかなかの難問です。とても、わたしではまとめることはできませんが、その思想のポイントとされることばをならべてみると、たしかに根津の東亜同文書院での教育活動と共通

する部分が出てきます。

まず、「知行合一」とうことばがあります。認識と体験行動は不可分であるということです。これは「陽明学」の大きな特徴といわれるものです。「陽明学」とよく対照される「朱子学」では、まず偉い人のいう通りに勉強しなさい、勉強して勉強して、そうして全てを理解してはじめて正しい行ないができるようになるというものです。これに対して王守仁が主張したのは、そんな悠長なことで何も進まないではないか、一歩ずつでもいいからとにかく進んでいくべきではないかというものです。つまり、知ることと行動することはひとつのこと、行動があってこそはじめて人間は物事を理解することができるというのが「知行合一」です。

これは、根津一の東亜同文書院での教育に通底します。根津は、中国を知るために何をしなければならないのか、まずは中国に渡って中国で生活しようではないかと考えた。中国の民衆を知るにはどうしなければならないか、それには中国の大地を自分の脚で歩いて学んできなさいと指導した。この自分で行動し、実際にみて、自分で考える、といった教育姿勢は、まさに「知行合一」といえるのではないでしょうか。

また、「事上磨錬」ということばが「陽明学」にはあります。これは日常での自己修養の大切さを説いたものです。東亜同文書院の学生は、中国を知るために中国の中に入って生活します。つまり、日々、「中国」を勉強していることになります。これも「陽明学」の思想と根津一の教育活動が通底している部分だと思います。

もうひとつが、「良知」とよばれるものです。「陽明学」の思想は、「知行合一」や「事上磨錬」を通して最終的にどうなるかというと、民衆の苦しみを感じて、民衆が安らかに暮らせる政治を実現する行動をおこすことを理想とします。この民衆の苦しみを感じることが「良知」なのです。根津の教育では、人々の気持ちを自分のものとして感じ取る感性を磨きなさいよ、ということになるでしょう。これも、日中提携のための相互理解を必要とした東亜同文書院の教育とつながるものです。

王守仁の思想は、「大同論」や「王道論」というような日本のアジア主義とか孫文の革命活動の思想的な基盤となっていくのですが、東亜同文書院ではどうなったかというと、政治的な方面へあまり進まなかった。今までの東亜同文書院の研究では、根津一が陸軍将校出身だったことからでしょうか、アジア主議者として政治活動の側面が強調されるものもあり、かれが院長をつとめていた東亜同文書院についても政治的だと総括されることすらあります。たしかに、かれ自身はさまざま政治的発言をしており、実際そのような活動をしていたかもしれませんが、学校の中で意図的に学生に政治活動を仕向けた形跡はありません。その思想は、あくまで道徳的な教え、徳育として作用したのだと考えます。

それが表れているのが、根津一が東亜同文書院の入学式で新入生たちに述べた言葉です。少々長いですが読んでみましょう。

「同文書院は単に学問を教えるだけの学校ではない。学問をやりたい者は大学に行くべきだ。〈中略〉志を中国にもち、根津にしたがって一個の人間たらんと欲するものは、この根津とともに上海にゆこう。」

注目すべきは、東亜同文書院は日本内地の大学とは違うと明言していることです。いい会社や官庁に入って出世したいというような社会的成功を望む者が入ってくるような学校ではないといっているのです。では、なにをするのかといえば、「人間たらんと欲す」、つまりはかれが傾倒する「陽明学」の思想に基づく立派な人間へと成長していくことを目指す学校だというのです。

各県の選抜試験を通って県費生で入ってきた優秀な学生、今でいえば高校を出たぐらいの若い多感な世代の学生たちは、入学式で最初に「学問をやるだけの学校ではない」、「人間たらんと欲する

ものは、この根津とともに上海にゆこう」、といわれるわけです。きっと学生たちは、この先生についていこう、この人の下で学んでいきたい、中国のために人生を捧げたい、と感動したに違いありません。その結果、「根津精神」や「書院精神」というものが生まれ、同窓生たちの間に強い結びつきができたであろうことが、よくおわかりになると思います。

6.2. 根津一とキリスト教

根津一の徳育、教育姿勢というものはだいたいおわかりになったと思います。では、これとキリスト教とのつながりをどこにみつけるかというと、ひとつに根津の妻「ゑい」の存在があります(写真 13)。この人は滋賀県長浜の醤油問屋のお

写真 13　根津ゑい

嬢さんで、おじさんがキリスト教の信者だったことからキリスト教を信仰するようになり、キリスト教系の同志社女子学校に入ります。卒業後は教育者になろうと、アメリカ留学を志望しつつ、学校に残って数学や英語を教えていたそうです。結局、29 歳で根津一と結婚したのですが、明治中頃のことですから、29 歳での結婚というのはかなりの晩婚だったと思います。おそらく、どうにかアメリカに渡りたいと機会を待ち続けていたのではないでしょうか。さらに、同志社時代には洋装、洋食を好んでいたそうですし、結婚後には妻は家をまもるものという時代に自ら希望して上海の東亜同文書院に行ったこともありました。こういったことからすると、根津の奥さんとなる「ゑい」は、明治時代の女性としてはよくいえばとても先進的な人物といえますが、当時の感覚でいえば相当変った人物だったように思われます。

この「ゑい」さん、いよいよ結婚が決まり、相手の根津一というのがどうにも風変わりな人らしいと耳にしたとき、とてもおもしろいことをいっています。わたしが結婚してこの男をキリスト教の道に導いてあげよう、もしなにかよくない点があったら正しい道へ導いてあげよう、と。ただ、実際には、ミイラ取りがミイラになったようで、彼女のほうが根津に心酔してしまい、写経をしたり根津が親しんでいた禅寺に行って座禅を組んだり、講話を聞いたりするようになっていきます。棄教したというような伝えられ方はされていませんが、結婚後はキリスト教から離れていったようです。しかし、さきに述べたように、結婚当初の「ゑい」は、夫である根津をキリスト教信仰にむかせようとすら思っていたのです。このようなキリスト教信者を妻とし、宗教上の問題で軋轢を生むことなく添い遂げた事実を根津を考えるときには留意しておかなければいけないでしょう。すくなくとも、根津個人とキリスト教は対立するような関係にはならなかったことがわかります。

もうひとつ、根津一とキリスト教とのかかわりをみていくと、明治時代のキリスト教と根津が傾倒した「陽明学」のつながりが注目されます。

熱心なキリスト教の信者であった内村鑑三(うちむらかんぞう)が、王守仁の思想を「キリスト教に最も近いものだ」と高く評価しています。ですから、ここに「陽明学」の影響をうけた根津一とキリスト教との接点が出てくることになるのです。参考として、朱子学を専門とする研究者小島毅(こじまつよし)氏がいっていることをみてみましょう。

「明治時代にキリスト教に入信していた知識人の多くにとって、キリスト教の説く隣人愛は、

別段新奇な教説ではなかった〈中略〉自己一身の栄達ではなく、隣人と共に生きることを強く主張する『マルコによる福音書』のような教えは、キリスト教への反感と偏見を拭い去ってみれば至極当然の教えとして受け入れることのできるものであった〈中略〉儒教への原理的な帰依が、キリスト教、それもプロテスタンティズムへの信仰をもたらしたのであった。彼らは陽明学的キリスト教徒であった。」

内村鑑三や新渡戸稲造、「教育勅語」の草稿を執筆した中村正直（なかむらまさなお）という人もそうですけれども、当時の日本を代表する知識人のなかには、少年期に儒学を学んで、ある時期からキリスト教に変わっていく人物が少なからずいました。従来は封建的な儒学の楔を断ち切ってキリスト教に昇華した、上昇していったというふうに総括されましたけれど小島氏がいっているところは違います。もともと日本人の考える「陽明学」とキリスト教的思索には接点があり、だからこそ、内村たちは儒学からスムーズにキリスト教信者になることができたというのです。

このことは、「陽明学」に傾倒した根津一による東亜同文書院の教育とキリスト教との関係を考える参考となります。さきにあげた坂本義孝は第1期生です、つまり東亜同文書院には最初からキリスト教信者がいたわけですが、こういったキリスト教信者が「陽明学」的な根津の教育に反発を覚えることはないということになります。根津先生がやっていることや説いている内容はキリスト教の教えと似ているところがある、と感じたであろうと想像できます。つまり、根津の東亜同文書院の教育とキリスト教信者は不協和音を生むことがなかったといえます。

7．東亜同文書院のなかのキリスト教

7.1. 聖書研究会

そういった東亜同文書院の中で、実際にどういったキリスト教の活動があったのかをみていきましょう。

実は1901年の創立当初から聖書研究会（バイブルクラス）といわれるものがありました。東亜同文書院が雇った英語講師ハネックスという人物が、授業とは別に聖書についての勉強会を開いていたのです。

これまでの東亜同文書院研究では、このハネックスという英語教師がいたことだけは伝えられてきたのですが、どのような人物で、どのような活動をしていたのかについてはまったく触れられてきませんでした。

では、ハネックスがどんな人物であったのかというと、上海のYMCAの協力主事だったのです。上海YMCA協力主事というのは、北米YMCA同盟から中国に派遣されている人物です。ですからアメリカのキリスト教系人物が、創立と同時に東亜同文書院で英語と共に聖書を学生に教えていたことになります。

これが1901年から1904年までの記録に残っている聖書研究会の参加者数です（表①ハンドアウト2頁）。1901年創立と同時に36名が参加しています。第1期生は入学時は79名、卒業時には60名いましたから、その中の36名つまり半数ぐらいが聖書研究会に参加していたのです。翌年は少々減りますが、1903年、1904年になると、全校学生200～250名の中で、やはり半数近くの91名という、かなりの人数が聖書研究会に参加していました。

表①　全校学生数に対する聖書研究会参加者数

年度（西暦 / 明治）	1901/34	1902/35	1903/36	1904/37
聖書研究会参加者	36	25	25～40	75～91
在校生数（＊入学者数 / 卒業者数）	79/60	175/136	243/208	248/208

この聖書研究会というのは英語で行なわれます。今までの東亜同文書院の研究ではあまり取り上げられていませんが、実は東亜同文書院は中国語と同じぐらいに英語教育にも力を入れていまし

た。さきほど触れた坂本義孝は卒業と同時に営口の税関に就職しています。当時の中国の税関というのはイギリスに支配されていましたから、向こうの税関で働くには中国語というよりも英語が必要だったのです。英語ができないと税関で働くことはできません。そんな職場に卒業と同時に入っているということからも、坂本義孝が東亜同文書院で中国語を勉強したから就職に役立ったというよりも、英語の勉強を一生懸命やっていたから就職できたということがうかがえます。当時の東亜同文書院生は英語を一生懸命やっていた。ですから、聖書研究会参加者の中にも、聖書自体にはあまり興味ないけれども、英語の勉強になるということで参加する者もいたと思いますが、それにしても全学生の半数近くが参加するということは、かなりの勢力だったといえるでしょう。

この聖書研究会は学校に認められたものだったようです。第2期生山口啓三の回想をみてみましょう。

「根津先生は基督教そのものに対して、一種の理解を持つていられたようである。二期の有志で作つたバイブルクラスに教室を利用すること、集合にドンドン太鼓を叩くことなど、院長から一応は断られたが後には許して下すつたことである。」

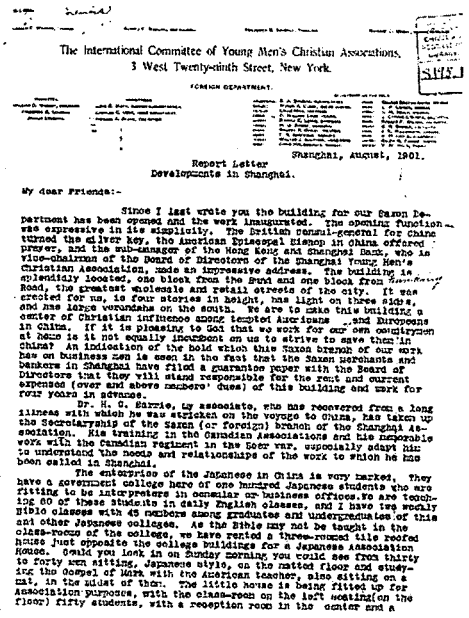
このように、学生からは、どうやら根津先生はキリスト教にも理解があるとみられ、またみてきたように創立当初から東亜同文書院ではキリスト教の活動が公かつ大規模に行なわれていたということがわかります。

7.2. 北米YMCA同盟文書に記された東亜同文書院

こういったキリスト教の活動というのは東亜同文書院側のもの、たとえば愛知大学で保管している資料の中には残っていません。しかし、アメリカの北米YMCA同盟の文書の中には記録が残っています。北米YMCA同盟というのは、当時、世界中のYMCAのリーダーシップをとる存在でした。ここが資金的にも人材的にも力があったので、中国や日本でYMCAの活動をしたいとなると、資金援助をしたり人材を派遣したりして活動が行われたのです。さきほどあげたハネックスもその一人だったわけです。かれらは派遣先でレポートを作って本部に送ります。それらが今もアメリカに保管されているのです。

わたしが入手したのは、東亜同文書院創立直後である1901年8月の上海YMCA総主事ロバート・E・ルイスのレポートと、1903年の上海YMCA総主事代理ウィラード・ライアンのレポートです。左側の写真(写真14.1)が1901年のロバート・E・ルイスの報告書の1頁目です。右側（写真14.2）のものがライアンの報告書の1頁目です。ハンドアウトに、これらレポートの聖書研究会に関する部分は抜き書きしてありますが、その概要を紹介していきましょう。

ルイスによれば、1901年8月時点では45名2クラスの聖書研究会があり、うち3名の学生が入信したとあります。5月に創立したばかりの東亜同文書院で、3カ月後にはキリスト教に入るものがいたことには驚かされます。さらに、校舎に隣接して聖書研究会専用の施設があったことが記さ


The International Committee of Young Men's Christian Associations,
3 West Twenty-ninth Street, New York.

FOREIGN DEPARTMENT.

Shanghai, August, 1901.

Report Letter
Developments in Shanghai.

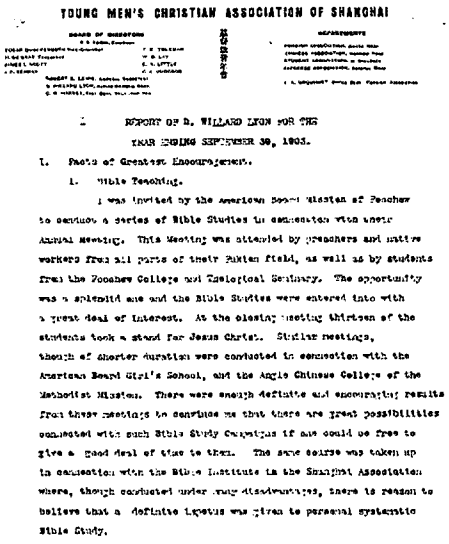
My dear Friends:-

Since I last wrote you the building for our Saxon Department has been opened and the work inaugurated. The opening function was expressive in its simplicity. The British Consul-general for China turned the silver key, the American Episcopal Bishop in China offered prayer, and the sub-manager of the Hong Kong and Shanghai Bank, who is Vice-chairman of the Board of Directors of the Shanghai Young Men's Christian Association, made an impressive address. The building is splendidly located, one block from the Bund and one block from Nanking Road, the greatest wholesale and retail streets of the city. It was erected for us, is four stories in height, has light on three sides, and has large verandahs on the south. We are to make this building a center of Christian influence among tempted Americans and Europeans in China. If it is pleasing to God that we work for our own countrymen at home is it not equally incumbent on us to strive to save them in China? An indication of the hold which this Saxon branch of our work has on business men is seen in the fact that the Saxon merchants and bankers in Shanghai have filed a guarantee paper with the Board of Directors that they will stand responsible for the rent and current expenses (over and above members' dues) of this building and work for four years in advance.

Dr. H. G. Harris, my associate, who has recovered from a long illness with which he was stricken on the voyage to China, has taken up the Secretaryship of the Saxon (or foreign) branch of the Shanghai Association. His training in the Canadian Associations and his honorable work with the Canadian regiment in the Boer war, especially adapt him to understand the needs and relationships of the work to which he has been called in Shanghai.

The enterprise of the Japanese in China is very marked. They have a government college here of one hundred Japanese students who are fitting to be interpreters in consular or business offices. We are teaching 80 of these students in daily English classes, and I have two weekly Bible classes with 45 members among graduates and undergraduates of this and other Japanese colleges. As the Bible may not be taught in the class-room of the college, we have rented a three-roomed tile roofed house just opposite the college buildings for a Japanese Association House. Could you look in on Sunday morning you could see from thirty to forty men sitting, Japanese style, on the matted floor and studying the Gospel of Mark with the American teacher, also sitting on a mat, in the midst of them. The little house is being fitted up for Association purposes, with the class-room on the left seating (on the floor) fifty students, with a reception room in the center and a

写真14.1　ロバート・E・ルイス報告書


YOUNG MEN'S CHRISTIAN ASSOCIATION OF SHANGHAI

REPORT OF D. WILLARD LYON FOR THE
YEAR ENDING SEPTEMBER 30, 1903.

I. Facts of Greatest Encouragement.

1. Bible Teaching.

I was invited by the American Board Mission of Foochow to continue a series of Bible Studies in connection with their Annual Meeting. This Meeting was attended by preachers and native workers from all parts of their Fukien field, as well as by students from the Foochow College and Theological Seminary. The opportunity was a splendid one and the Bible Studies were entered into with a great deal of interest. At the closing meeting thirteen of the students took a stand for Jesus Christ. Similar meetings, though of shorter duration were conducted in connection with the American Board Girl's School, and the Anglo Chinese College of the Methodist Mission. There were enough definite and encouraging results from these meetings to convince me that there are great possibilities connected with such Bible Study Campaigns if one could be free to give a good deal of time to them. The same course was taken up in connection with the Bible Institute in the Shanghai Association where, though conducted under many disadvantages, there is reason to believe that a definite impetus was given to personal systematic Bible Study.

写真 14.2　ウィラード・ライアン報告書

れています。YMCA の援助があったのでしょうか、この聖書研究会は、東亜同文書院のすぐ近くで建物を借りて活動していたのです。

1903 年 9 月のライアンのレポートをみてみましょう。週 1 ～ 2 回の活動には 30 名から 40 名が参加していたとあります。そして、中国人の学生と比べると、東亜同文書院の学生というのはとても哲学的だったという感想が述べられています。これは、YMCA 側からみて、東亜同文書院の学生はキリスト教の活動の対象としてかなり脈があるとみえていたということです。当時の中国のキリスト教系学校の学生のなかには、良い教育を受けることが目的で入る者もおり、形式的にはともかく実際には信仰がない者ものもいました。日本でも有名な郁達夫（いくたつふ）という作家がいます。この人も一時はキリスト教系の学校で学ぶのですが、その後はキリスト教との接点は全然出てきません。つまり、当時の中国には、質の良い教育をうけるためにキリスト教を利用しようとする風潮があったようなのです。そういう学生とくらべると、東亜同文書院の学生は宗教的に手応えがあるように思えたのでしょう。

7.3. 高昌廟桂墅里校舎

さて、創立当時の東亜同文書院の平面図（図 1）をみてみましょう。これは高昌廟桂墅里（こうしょうびょうくいしゅり）校舎のものです。

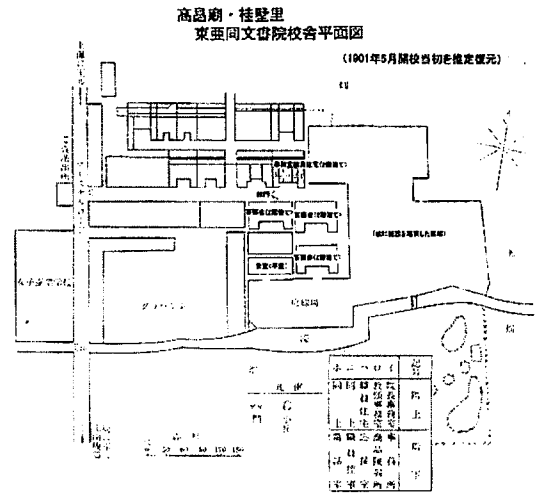


図 1　開校当初の東亜同文書院

中国人街の街路の奥まったところに校門があります。校門の北側が事務棟。向かって南側が学生寄宿舎と教室です。みてのとおり、とても小規模なものです。さきほどのルイス・レポートには事務棟の向かいに聖書研究会が借りた建物があったとありますから、ほとんど校内といってよいような身近な場所に聖書研究会があったことがわかると思います。当時の写真が少し残っていますから御覧いただきましょう。

これが、さきほどの校門です（写真 15.1）。これだけみると、学校というよりも中国の下町の街路の中に入ったみたいですね。東亜同文書院は、こういった中国人街の建物を数棟使って活動していたのです（写真 15.2）。これは創立の式典の様子を撮った写真ですが（写真 15.3）、随分とこぢんまりとした場所にみえます。このように、当時の東亜同文書院は想像以上に小規模なものであったようです。そして、この場所こそ、今、お話してきた聖書研究会が行われていた場所だったのです。

写真 15.1　高昌廟桂墅里校舎正門

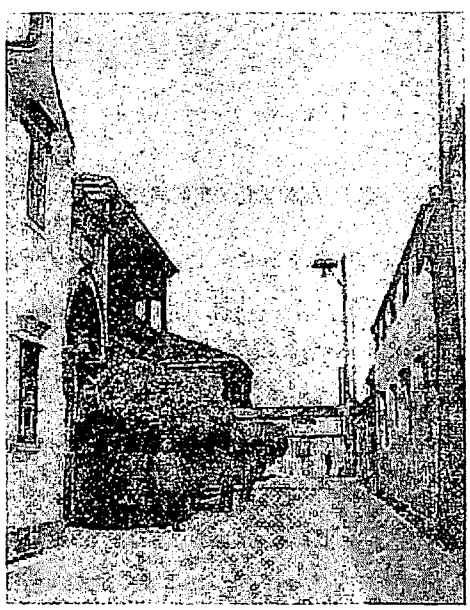


写真 15.2　高昌廟桂墅里校舎敷地

写真 15.3　東亜同文書院開院式

7.4. 聖書研究会と学生 YMCA

さて、この聖書研究会は最終的にどうなったのでしょうか。紹介してきたようなキリスト教の活動は、実は姿を消していきます。

「表②」をご覧ください。

表②　校内のふたつのキリスト教グループの比較

	校舎	時期	特徴
聖書研究会	高昌廟桂墅里(クイシュリ) (1901.5-1913.7)	1901-1904…?	・学校公認の校内活動. ・北米 YMCA 系の人物が指導. ・英語使用.
学生 YMCA	赫司克而路(ハスケル) (1913.10-1917.4)	1915 -	・非公認同好会. ・神愛館バイブルクラス参加者が結成 7. ・学生と信者教員との勉強会.

聖書研究会のほかにも東亜同文書院にはキリスト教的な集まりである学生 YMCA というものがありました。時期的には、聖書研究会が姿を消した後のものです。この時期の前後をみるならば、聖書研究会の後継組織が学生 YMCA のようにも思えるのですが、両者の性質を比較してみると、かなり違うものであり関係はなさそうです。

聖書研究会の方は、みてきたように東亜同文書院院長である根津一に認められ、学校付近に施設を借りたり、最終的には学校の教室をすら使っていました。これを指導していたのはハネックスなど北米 YMCA 同盟というアメリカ系のキリスト教関係者たちで、そこでは英語が使われていたのです。

それに対して、学生 YMCA というのは、東亜同文書院の近くにあった日本人向けのキリスト教会に個人的に参加していた学生が数名集まったものです。キリスト教信仰者のみの集まり、信者の親睦会的なものだったと考えられます。主な活動は学生同士、あるいはキリスト教信者の教師と個人的に話をするという程度のものですから、聖書研究会とは規模も性質も全く違います。

7.5. 聖書研究会の消滅

さて、聖書研究会のキリスト教の校内活動は、学生 YMCA 結成以前にはすでに確認できなくなってしまいます。では、どうして聖書研究会は姿を消したのでしょうか。わたしは、その原因が東亜同文書院の最高責任者つまり院長である根津一にあるのではないかと考えています。かれは東亜同文書院の経営母体である東亜同文会の幹事長をも兼任しており、たんなる院長という学校部門の責任者というだけではなく同会の実質的な指導者でした。このことふまえると、聖書研究会のような学校公認の活動の消長を左右することができるのは、かれ以外にいないのではないかと思うのです。

さらに、かれの発言を注意深くみていくと、聖書研究会消滅にかかわる可能性があるものをみることができます。根津一は、1910 年代になるとアメリカに対して強い警戒心をいだくようになりました。たとえばこんなことをいっています。

「亜米利加ガ今年ノ春突如トシテ持出シマシタ満洲鉄道ノ中立問題ト曰ヒ，団匪事件ノ賠償金無慮三千五百万円ヲ一昨々年学生派遣ノ条件ノ下ニ棒引ニシタコトヽヒ〈中略〉日本ノ対清経営ニハ重大ナル関係ガアルダラウト思ヒマス」

当時、第一次世界大戦前夜のアメリカは急速に国力を強めており、列強諸国の中国での権益争奪にも大きな影響力をもつようになっていました。たとえば、日本が勢力を強めていた「満洲」地域を中立にすべきだと提言したり、義和団事件の賠償金を減額し、さらに残った賠償金も全て中国人学生のアメリカ留学費用に充てる政策を打ち出したりしていたのです。前者は、日本の中国進出を牽制するものですし、後者は賠償金がすべて中国人のためにつかわれるということです。これで中国でのアメリカの株が大変上がりましたし、優秀な中国人がどんどんアメリカに留学していくことになりました。こういった状況をみていた根津一はすごく危機感を抱くわけです、これでは中国の輿論がどんどんアメリカ寄りになってしまい、中国は日本よりもアメリカとの関係を密にしていくことになってしまうのではないか、さらにアメリカ留学経験者が中国社会で重きをなすようになると、中国でのアメリカの影響力がますますあがっていくのではないか、と。

また、このようなこともいっています。

「亜米利加の風が支那の社会に段々と拡まると，其の結果はどうなるかと云ふと、名教と，相容れないことになりはせぬか」

このアメリカの「風」は、プラグマティズムの語に代表される当時のアメリカの思想的なことをもさすものでしょうが、もちろん、そこにはキリスト教のプロテスタンティズムが横たわっています。根津は、こうしたアメリカの「風」つまりアメリカ社会のもつ気風が、名教つまり儒教を基層にした中国社会を根幹から変質させることになるのではないかと危惧したのです。これは根津が傾倒した王守仁など日本と中国を結ぶはずの精神的なつながりが失われることでもあります。そのようなアメリカの中国での台頭は、根津には日本にとって大きな脅威と映ったわけです。

そして、このように根津一がアメリカの動きに危機感を表明しはじめた時期と同じくして、さきほどの聖書研究会が姿を消します。この二つの事柄を結びつける直接的な資料はないのですが、東亜同文書院の中に入ってキリスト教の活動をしていた人々が北米 YMCA 同盟つまりはアメリカ系の人々であったことを考えると、この時期的な一致に何らかの関連性を想像するのは、現実から遠くはなれたものではないと思います。

8. 坂本義孝の東亜同文書院改革提言

こうして聖書研究会はなくなってしまうわけですけれども、次に聖書研究会があった頃の東亜同文書院で学んだキリスト教信者坂本義孝についてみていきましょう。

校内でキリスト教の活動が大々的に行われていた時期に学んだ坂本義孝は、アメリカから帰国して間もなく東亜同文書院の教授に就任します。かれの回想によれば帰国直後に根津一と会っていますから、根津直々のスカウトがあったかもしれません。しかし、十数年ぶりの東亜同文書院内には同好会程度の数人の集まりである学生 YMCA はあっても、かつての聖書研究会のような大規模なキリスト教的活動はなくなっていましたし、かれの恩師であり、かつてキリスト教に一定の理解を示していたこともある根津も間もなく引退してしまいます。この学校の変化をみて、かれは東亜同文書院が悪い方向へと大きく変化していると感じたようです。そこで、どうしたのかというと、学校の改革を提言しはじめます。

「余にとりては近年書院が外務省文部省より細微の点まで検束さるのでないかと疑るゝが之は余りに官庁に依頼するから厳重なる取締といふ代価を支払はねばならぬのであつて〈中略〉もし官僚的形式主義を準して書院を経営せは内よりも外よりも破綻を来たす事必然である理当である。」

最後の行に注目してください。今のままでは東亜同文書院は破滅するといっているのです。このように猛烈に東亜同文書院の現状を批判するわけです。これに対してのどうすればよいのかということについては、次のように述べています。

「殉教殉道の精神あつて始めて書院の反省が意義付けられ、書院の復興が実現し延いては東亜の復興に及び得るのである、真に中国の為になる日本人ならば日本の為になる事は勿論である，小我に捕はれ日本、日本といふておる所には日本の為にもならぬ結果を生する、書院が思切つて反省すべきは斯点にある、身を殺して仁を成す、これ霊界に永遠に生くる唯一の方途である。」

字面をみればおわかりになると思いますが、とても宗教的な文句になっています。しかし、内容はさきほどの根津一の教育姿勢や日本の「陽明学」と通底しているように読めるのではないでしょうか。つまり根津時代の「書院精神」への回帰を主張しているといえるでしょう。しかし、一方で、このことばはまったく具体性がなく精神的なものでしかありません。

9. 東亜同文書院の発展と対支文化事業部

では、坂本が東亜同文書院はこのままでは潰れてしまうといっていた時代、現実の東亜同文書院の状況はいったいどのようなものだったのでしょうか。

坂本が「破綻を来たす事必然」と危機を叫んだ時期、実際の東亜同文書院はそのことばとは反対にどんどん拡張していたのです。中華学生部ができたり、専門学校令が適用されたりしています。専門学校令適用以前の東亜同文書院というのは、いまでいうフリースクールと同じで、日本の学制の中では正式な学位を取得できる学校ではありませんでした。卒業者は、実質的に専門学校に相当するとして「学士」号を自称していたにすぎません。これが正式に専門学校として位置づけられることになりましたから、日本内地の同等学校同様に卒業生の身分がしっかりと確保されることになったのです。

また、1920 年代、これは中国で軍閥が割拠して政治的に混乱した時期ですけれども、さきほどみていただいた「大旅行」が質的にも規模的にも最盛期を迎えます。中国の奥地まで東亜同文書院の学生が割と自由に調査旅行ができた時代でした。このあと 30 年代になると、ご存じのように日中戦争がはじまり、共産党支配地域や国民党支配地域には脚を踏み入れることができなくなり、日本軍の占領地域でその庇護を受けながら調査をするしかないという時代になってしまうのです。それでも、1939 年には大学に昇格していますから、坂本が東亜同文書院の行く末に危機感を抱いた時

期は、現実には東亜同文書院にとっては上り調子の時代、とらえ方によっては最盛期ともいえるような時代だったのです。

そうであるならば、坂本の危機感とは根拠がないものかといえば、必ずしもそうとはいえません。かれの危惧の根拠になることが、この時期にたしかにおこっていたのです。

「表③対支文化事業特別会計法成立前後の東亜同文会及び東亜同文書院の経常収入と政府補助金の割合」を御覧ください。

東亜同文書院の学校としての発展というのは、実は日本政府の指導がどんどん強化されることと表裏一体のものだったのです。注目していただきたいのは同表中「⑤同会経常収入に対する補助金割合」です。これは東亜同文書院を経営する東亜同文会の収入に占める国庫補助金の割合をしめしています。この割合は、1923年あたりまでは、おおよそ30%台で推移しています。1923年3月「対支文化事業特別会計法」が成立し、国庫補助金が外務省の関連機関である対支文化事業部によって管理され、これが実際に機能しはじめる1924年あたりから25年にかけて、国庫補助金が占める割合が1925年39.8%、26年51%、27年52%、28年46%と収入額の半分にまであがっていきます。つまり、国からの補助を受けないと運営できない状態に変わっていくわけです。もちろん只でお金をくれるわけがありませんから、この数字の上昇というのは、そのまま外務省の指導力が強くなっていったことを示しているでしょう。

このように、東亜同文書院の発展は、日本政府の影響力が強まっていくことと同一だったのです。これが何を意味しているのかというと、徳育を基層にすえた根津一の私塾的な性格を持った東亜同文書院が、日本の学校の制度の中に組み込まれていったということです。いわば根津一個人の学校だった東亜同文書院が、日本の内地の多くの学校と同じような性格をもつものになっていったのです。そして、この点について、坂本義孝は、このままでは東亜同文書院は破綻すると危惧したのです。

表③　対支文化事業特別会計法成立前後の東亜同文会及び東亜同文書院の経常収入と政府補助金の割合　（単位；円）

年度（西暦 / 元号）	1919/8	1920/9	1921/10	1922/11	1923/12
総収入	319,109.45	798,461.24	793,842.77	—	—
① 東亜同文会経常収入	316,566.86	402,096.87	512,653.32	582,824.11	562,327.32
②同会経常収入内補助金	116,960.00	124,010.00	171,533.00	179,533.00	182,726.00
③同会経常収入内東亜同文書院経常収入	—	233,034.27	401,427.16	438,805.37	385,412.44
④同会経常収入内東亜同文書院向け補助金	—	65,960.00	115,960.00	115,960.00	115,960.00
⑤同会経常収入に対する補助金割合（②÷①）	37%	30.8%	33.5%	30.8%	33.5
⑥同会経常収入に対する東亜同文収入割合（③÷①）	—	58%	78.3%	75.3%	69%
⑦ 同会経常収入内補助金に対する東亜同文書院補助金の割合（④÷②）	—	53.2%	67.6%	64.6%	63.5%
年度（西暦／元号）	1924/13	1925/14	1926/15・1	1927/2	1928/3
総収入	—	—	—	—	—
① 東亜同文会経常収入	606,310.29	602,459.54	623,472.20	611,456.88	690,945.60
②同会経常収入内補助金	179,000.00	240,000.00	319,000.00	319,000.00	319,000.00
③同会経常収入内東亜同文書院経常収入	455,554.70	435,260.00	466,559.39	465,670.47	505,638.00
④同会経常収入内東亜同文書院向け補助金	110,000.00	153,000.00	192,000.00	192,000.00	192,000.00
⑤同会経常収入に対する補助金割合（②÷①）	29.5%	39.8%	51.2%	52.2%	46.2%
⑥同会経常収入に対する東亜同文収入割合（③÷①）	75.1%	72.3%	74.8%	76.2%	73.2%
⑦同会経常収入内補助金に対する東亜同文書院補助金の割合（④÷②）	61.5%	63.8%	60.2%	60.2%	60.2%

10. ふたつの「書院精神」

ここで、もう一度「書院精神」ということばに注目してみましょう。

まず大本の「書院精神」。これは根津一のものです。根津の思想や教育姿勢を背景としたもの、かれが東亜同文書院の院長兼東亜同文会幹事長としてリーダーシップをとり、日本の外務省や大蔵省に乗り込んで資金を確保しながら、自主的にやっていた時代の「書院精神」です。

しかし、根津の引退後、それは同じままというわけにはいかなくなります。そこでできたのが坂本義孝のものです。根津一の教育を直接受けた坂本が、アメリカ生活から戻った時、大きく変化しつつあった東亜同文書院をみて、創立当時に戻らなければいけないと改革を叫んだときの「書院精神」です。そして、もうひとつ現実に適応した「書院精神」があります。これは実際の東亜同文書院がたどったもので、さきほどみた学校の発展と引き替えに日本の学制に組み込まれていくことをよしとしたものです。

10.1. 坂本義孝の理想化した「書院精神」

次に、この理想化した「書院精神」と現実に適応した「書院精神」を比較してみましょう。

まず、理想化した坂本義孝の「書院精神」をみていきましょう。さきほど紹介したように坂本の教育活動というのは、常にキリスト教と共にありました。ですから、かれの東亜同文書院における活動も、当然キリスト教信仰とひとつのものだったと考えられます。これは、結局、日中関係の悪化と共産思想の広がりから最終的には頓挫することになります。

日中関係の悪化というのは、もちろん日本の中国侵略の激化のことです。坂本義孝は東亜同文書院の対中国人教育部門である中華学生部の最高責任者に就任しますが、日本の侵略がひどくなるにつれて中国人学生が集まらなくなります。侵略している当事者である日本の学校なのですから、中国人向けに教育活動をしますよ、といったところで人が集まるはずがありません。教育活動をしたくても対象となる学生がいなくなっていくわけです。

頓挫するもうひとつの要因に共産思想のひろがりというのがあります。キリスト教と共産党というのは、今ではそうでもありませんが当時のマルクス主義者は、宗教は思想の阿片である、というふうにいっていましたから、概してキリスト教に批判的であったわけです。キリスト教信者であったかれにとっては、キリスト教的な感覚で教育をしようにも、それ自体が批判の対象となりうるような状況が生じたことになります。

このふたつは、とくに若者の間で勢力をもつことになりますから、かれが教育活動をしようにも学生がどんどんいなくなり、どれだけ理想を高くもっていたとしても現実には活動ができなくなってしまうのです。

こういったことは学生がいなくなっていくこと以外の事柄にみることができます。たとえば、東亜同文書院中華学生部での坂本義孝の部下に彭阿木（ほうあぼく）という台湾出身の人物がいました。かれは汪兆銘（おうちょうめい）の奥さんの通訳なんかをして、後には汪兆銘政府に入っていったのですが、一説には日本、国民党、中国共産党すべてにかかわる三重スパイだったのかもしれないといわれるような複雑な人です。最後は日本軍によって毒殺されたとも伝えられています。このような人物の存在は、坂本の理想の身近に日中関係悪化が忍び寄っていたことを象徴しているでしょう。

また、かれの教え子の洪水星（こうすいせい）という人物にも坂本の理想を打ち砕くような現実をみることができます。洪は、中華学生部卒業後、坂本の外務省への個人的な働きかけによって京都帝国大学に留学することができ、帰国後は上海のセント・ジョーンズ大学の教師になっています。坂本が留学の世話までしていることからすると、かなりかわい

がっていたとおもわれるのですが、この洪が意外なところで出てきます。なんと満鉄調査部事件の調書の中に名前が記されているのです。それによれば、満鉄調査事件での逮捕者が、上海でマルクス主義関連資料を集めていた際、共産党員と連絡をつけてくれたのが洪水星だったというのです。つまり、坂本が目をかけていた教え子が、実はキリスト教に批判的な左翼系の人物であったことになります。

こうして、坂本の教育活動は、現実の前に為す術なく頓挫していったのです。

10.2. 現実の「書院精神」

もう一方の現実に適応した「書院精神」は、実際に東亜同文書院がたどった道です。日本はどんどんと中国を侵略をしていきますが、この現実に適応しつつ活動していったわけです。これを侵略に荷担したと批判することは簡単ですけれど、客観的にみれば、そうした悪い面もあれば良い面もあります。

良い面としては、日本の中国侵略の方向と妥協しながらも、日本人が生きた中国、現実の中国を学ぶ場を、1945年の敗戦までずっと確保し続けたということです。この時期学んだ人々のなかには、戦後、日中友好に尽力した人物が多数いましたから、日中にわたる教育活動として評価すべきものだったといえます。しかし、日本のためだけに中国に犠牲を強いる侵略について妥協するということは、当然創立当初の近衛篤麿や根津一の志と大きく食い違ってくることになります。卒業生は中国についての専門家ですから、卒業後は意図的だろうがそうでなかろうが、日本の中国侵略に加担することを余儀なくされます。学校の存在、教育、そしてそれが実際活用される場面が分裂していくわけです。

そして、さきほどみてきたように、東亜同文書院は日本内地の学制に組み込まれていくことによって規模を拡大し発展してきました。そして、この時期の日本は中国を侵略していたのです。つまり、中国を侵略する日本という枠内で活動することを選択したといえるでしょう。これは日本の中国侵略の失敗と運命をともにすることを意味します。そうして、敗戦と同時に東亜同文書院はなくなりました。ですから、いくら日中友好のために尽くす人材を育てたといっても、中国側からみれば侵略者としての側面がでてくることになるのです。

11. おわりに

このように「書院精神」というものを軸にして東亜同文書院をみてみると、初期東亜同文書院にみられたキリスト教的な活動や、その中で学んだキリスト教信者坂本義孝による理想化された「書院精神」が生じたことは注目すべきことでしょう。そして、これに対して現実の東亜同文書院がたどった「書院精神」が対照的にうかびあがってきます。

わたしの今回の話は、このふたつの「書院精神」を並べて優劣をつけるものではありませんし、そのようなことをしてもあまり意味はありません。なぜならば、たとえ東亜同文書院が坂本の理想化した「書院精神」の路線をとったとしても、結局、中国侵略をおしすすめる日本の学校であった以上は、日本人の学生を失ったことでしょう。そもそも国庫補助金に依存していた以上、侵略を是とする政府に否を唱えて学校が存続できるはずもありません。また、この理想化した「書院精神」は日中友好に尽くしているようにみえても、キリスト教信仰が基層にあった以上、当時の共産思想の興隆や中華人民共和国成立後にキリスト教系大学から宗教色が排除された事実をふまえると、必ずしも中国の状況と完全に合致し得たものではなかったのかもしれないのです。

これは大変悲しいことなのですけれども、東亜同文書院はふたつの「書院精神」のどちらの道を

とっても日本の敗戦と共に消滅する運命にあったといえます。

話の冒頭でわたしは、東亜同文書院の創立には中国側の協力があったということを強調しました。このことが示しているのは、東亜同文書院の存在は、中国の承認があってこそはじめて成立するものだったということです。いくら日中友好を掲げていたとしても、それが日本側のみのものであったならば、なんら意味をなしません。活動が日中にわたるものである以上、中国側の承認が大切なのです。

こうした東亜同文書院の姿をみることは、実は現在の日中関係を考える上でも大切なことだと考えます。たとえば、現在、愛知大学をはじめ日本のさまざまな学校が中国でも教育活動をしているのですが、中国とともに教育活動ができるというのは、東亜同文書院の歴史をみれば、日中の友好関係があってこそはじめて成立していることがわかります。このように、東亜同文書院について考えることは、たんに歴史的事実の確認にとどまらず、わたしたち自身が現在やこれからの日中関係を考えるとき、いろいろな示唆をあたえてくれるものなのではないでしょうか。

以上で、今回の話を終えたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

【司会】 先生どうもありがとうございました。少しお時間がございますので質問を受け付けたいと思います。何かご質問のある方はお手を挙げてください。よろしいでしょうか。それでは本日の講座はこれで終了させていただきます。石田先生にもう一度拍手をお願いいたします。

市民トラム配布資料

東亜同文書院生とキリスト教

ふたつの書院精神

東亜同文書院大学記念センター
リサーチアシスタント　石田卓生

東亜同文書院とは？

○東亜同文会（会長・近衛篤麿[1]）が中国側の協力をうけて上海租界外に開校（1901.5）.

○日中提携へむけた人材養成.

ビジネス・スクール←荒尾精[2]の日清貿易研究所関係者（根津一[3]など）の参画.

中国語教育『華語萃編』，学生によるフィールドワーク「大旅行」.

同窓間のつよい団結力→「書院精神」あるいは「根津精神」.

どうして東亜同文書院とキリスト教なのか？

○日本のキリスト教とのかかわり.

日本 YMCA 同盟の日露戦争慰問活動に参加（1904-1905），同主事大塚素（1906），

同名誉主事ガレン・フィッシャー，京都 YMCA 総主事村上正次（1917.4），日本メソジスト教会監督平岩愃保（1917.5）.

○坂本義孝[4]の存在.

東亜同文書院第 1 期生，東亜同文書院教授，同中華学生部部長.

国際的活動；アメリカ留学，国際労働機関（ILO）総会，太平洋問題会議.

キリスト教；上海日本人 YMCA 理事長，同外国学校校長，聖約翰大学[5]教授.

「書院精神」とはなにか？

○王陽明の思想の影響　「知行合一」認識と体験行動の不可分.

「事上磨錬」日常での自己修養.

「良知論」民衆の苦しみを感じとる→大同論・王道論へ.

○根津一の東亜同文書院入学式での徳育重視の教育姿勢.

根津一をめぐるキリスト教

○キリスト教と王陽明の思想→内村鑑三の王陽明評価，「キリスト教に最も近い」.
→明治期の日本陽明学とキリスト教との親和性.

○妻ゑい．キリスト教信者，同志社女学校高等科卒業.

東亜同文書院聖書研究会とはなにか？

○英語講師ハネックス（上海 YMCA 協力主事）の聖書研究会.

表①全校学生数に対する聖書研究会参加者数[6]

年度（西暦 / 明治）	1901/34	1902/35	1903/36	1904/37
聖書研究会参加者	36	25	25 ～ 40	75 ～ 91
在校生数（＊入学者数 / 卒業者数）	79/60	175/136	243/208	248/208

○院長根津一が認めた校内での活動.

北米 YMCA 同盟報告書に記録されている東亜同文書院聖書研究会とは？

○上海 YMCA 総主事ロバート・E・ルイス報告（1901.8）資料①.
→ 45 名を 2 クラス，3 名が洗礼，校舎に隣接する聖書研究会棟.

○上海 YMCA 総主事代理 D・ウィラード・ライアン報告（1903.9.30）資料②.
→参加者 30 ～ 40 名，中国人学生より哲学的な日本人学生.

○キリスト教の宗教活動を校内でおこなう東亜同文書院聖書研究会.

姿を消した東亜同文書院聖書研究会

表②校内のふたつのキリスト教グループの比較聖書研究会と学生 YMCA

	校舎	時期	特徴
聖書研究会	高昌廟桂墅里（クイシュリ）（1901.5-1913.7）	1901-1904…？	・学校公認の校内活動. ・北米 YMCA 系の人物が指導. ・英語使用.
学生 YMCA	赫司克而路（ハスケル）（1913.10-1917.4）	1915 -	・非公認同好会. ・神愛館バイブルクラス参加者が結成[7]. ・学生と信者教員との勉強会.

○ 1910 年代，根津一はアメリカの中国進出への警戒を強める.
義和団事変賠償金をアメリカ留学費用へ．1911 年清華学堂（現・清華大学）開校.
→この時期，聖書研究会は姿を消し，書院非公認同好会学生ＹＭＣＡが成立している.

坂本義孝の東亜同文書院での活動はどのようなものだったのか？

○精神面からの学校改革を提唱→キリスト教信教と「書院精神」が合致.

余にとりては近年書院が外務省文部省より細微の点まで検束さるのでないかと疑るゝが之は余りに官庁に依頼するから厳重なる取締といふ代価を支払はねばならぬのであつて [中略] もし官僚的形式主義を準して書院を経営せは内よりも外よりも破綻を来たす事必然である理当である[8]

殉難殉教殉道の精神あつて始めて書院の反省が意義付けられ，書院の復興が実現し延いては東亜の復興に及び得るのである，真に中国の為になる日本人ならば日本の為になる事は勿論である，小我に捕はれ日本，日本といふておる所には日本の為にもならぬ結果を生する，書院が思切つて反省すべきは斯点にある，身を殺して仁を成す，これ霊界に永遠に生くる唯一の方途である[9].

東亜同文書院の発展その軌跡はどのようなものだったのか？

○中華学生部（1918），専門学校令適用（1921），大学昇格→根津一の私塾的存在から大日本帝国の学校へ.
○外務省指導の強化（1923.3「対支文化事業特別会計法」成立）.

表③対支文化事業特別会計法成立前後の東亜同文会及び東亜同文書院の経常収入と政府補助金の割合　（単位；円）[10]

年度（西暦 / 元号）	1919/8	1920/9	1921/10	1922/11	1923/12
総収入	319,109.45	798,461.24	793,842.77	—	—
①東亜同文会経常収入	316,566.86	402,096.87	512,653.32	582,824.11	562,327.32
②同会経常収入内補助金	116,960.00	124,010.00	171,533.00	179,533.00	182,726.00
③同会経常収入内東亜同文書院経常収入	—	233,034.27	401,427.16	438,805.37	385,412.44
④同会経常収入内東亜同文書院向け補助金	—	65,960.00	115,960.00	115,960.00	115,960.00
⑤同会経常収入に対する補助金割合（②÷①）	37%	30.8%	33.5%	30.8%	33.5%
⑥同会経常収入に対する東亜同文書院経常収入割合（③÷①）	—	58%	78.3%	75.3%	69%
⑦同会経常収入内補助金に対する東亜同文書院補助金の割合（④÷②）	—	53.2%	67.6%	64.6%	63.5%
年度（西暦 / 元号）	1924/13	1925/14	1926/15・1	1927/2	1928/3
総収入	—	—	—	—	—
①東亜同文会経常収入	606,310.29	602,459.54	623,472.20	611,456.88	690,945.60
②同会経常収入内補助金	179,000.00	240,000.00	319,000.00	319,000.00	319,000.00
③同会経常収入内東亜同文書院経常収入	455,554.70	435,260.00	466,559.39	465,670.47	505,638.00
④同会経常収入内東亜同文書院向け補助金	110,000.00	153,000.00	192,000.00	192,000.00	192,000.00
⑤同会経常収入に対する補助金割合（②÷①）	29.5%	39.8%	51.2%	52.2%	46.2%
⑥同会経常収入に対する東亜同文書院経常収入割合（③÷①）	75.1%	72.3%	74.8%	76.2%	73.2%
⑦同会経常収入内補助金に対する東亜同文書院補助金の割合（④÷②）	61.5%	63.8%	60.2%	60.2%	60.2%

ふたつの「書院精神」それはどのような結末をむかえたのか？

○「書院精神」；根津一の思想・教育姿勢←明治期日本の王陽明思想解釈.
○理想化；坂本義孝のキリスト教信教と一致した「書院精神」日中関係悪化→頓挫.
○現実化；大日本帝国の枠内では発展→敗戦と運命をともにする.

資料① 上海 YMCA 総主事ロバート・E・ルイス報告（1901.8）

The enterprise of the Japanese in China is very marked. They have a government college here of one hundred Japanese students who are fitting to be interpreters in consular or business offices. We are teaching 80 of these students in daily English classes, and I have two weekly Bible classes with 45 members among graduates and undergraduates of this and other Japanese college. As the Bible may not be taught in the class-rooms of the college, we have rented a three-roomed tile roofed house just opposite the college buildings for a Japanese Association House. Could you look in on Sunday morning you would see from thirty to forty men sitting, Japanese style, on the matted floor and studying the Gospel of Mark with the American teacher, also sitting on a mat, in the midst of then. The little house is being fitted up for Association purposes, with the class-room on the left seating (on the floor) fifty students, with a reception room in the center and a reading-room on the right. Three of the class are baptized Christians, two more desire to be; but "more study and testing" was my reply to this request[11].

中国での日本人の事業は注目すべきものです．かれらには領事館や企業の通訳になるべき100人の学生を擁する政府系の学校〔東亜同文書院〕があります．わたしたちは毎日英語の授業でこの80名を教え，この卒業生と在学生や他の日本の学校の中から45名が参加する週一回の聖書研究会を2クラスもっています．聖書を学校の教室で教えることは禁じられているので，学校向かいに3室あるタイル葺きの建物を借りました．日曜の朝には30名から40名が，日本式に，床の敷物に直に座り，その真ん中に座るアメリカ人教師とマルコの福音を学んでいます．そのささやかな建物は組織の目的にふさわしいもので，左側は（床に直に座って）50名が座る聖書研究会のもの，中央に応接室，右側に勉強部屋があります．聖書研究会に参加した3名はキリスト教の洗礼をうけ，2名がさらに洗礼を希望したのですが，わたしはさらに学び試練をうけなさいとこたえました．

資料② 上海 YMCA 総主事代理 D・ウィラード・ライアン報告（1903.9.30）.

Not the least interesting, I trust not the least fruitful work which I have been able to do in the line of Bible teaching during the year, was the class in the Japanese Commercial College in Shanghai. This class averaged between thirty and forty in attendance and was conducted in English. I find the Japanese students much more philosophical in their turn of mind than the Chinese Students. Many most interesting questions were asked in the class. Some of then were put in writing, and handed to me in advance. The following exract〔extract〕will indicate the nature of these questions:

"Will you kindly answer the following question please. I have heard that our Father in Heaven is omniscent〔omniscient〕, almighty, and benevolent. But we see that there take place frequently in the world, earthquake, flood, thunder, the eruption of volcane〔volcano〕, etc. If God has no force to make calm from these disasters, he is not omnipotent. If God did not foreknow that these matters take place, He is not omniscent〔omniscient〕. How do you think, Sir. Please answer it." [12]

興味深く，またわたしが信じているのは上海の日本の商業学校〔東亜同文書院〕で一年間に渡る有意義な聖書教育をすることができたことです．このクラス〔聖書研究会〕の参加者は平均30名から40名ほどで，英語が用いられました．日本人学生は中国人学生よりも性質がきわめて哲学的です．幾多の興味深い質問がクラスでなげかけられました．ときには筆記された質問が前もって手渡されました．次にあげるのは，その概要です．

「どうかお答え下さい．神とは全知全能にして慈悲深いとききました．しかし，世界中で地震，洪水，雷，噴火などが頻繁に起こります．災害をしずめる力をもたないならば，全能ではありません．問題が起こることを予知しなかったならば，全知ではありません．どのようにお考えになりますか．先生，どうかお答え下さい．」

坂本義孝著作一覧

「滞米印象記」『滬友』(17) 東亜同文書院同窓会，1921.11.
「同じ経験から」『滬友』(17)，1921.11.
「北京大会の意義」『滬友』(19)，1922.7.
「公人私人」『上海』(523) 春申社，1923.3.12.
「エルサレムにて」日本基督教青年会同盟『開拓者』18 (5)，1923.5.
「渡欧の途上より」『滬友』(21)，1923.8.
「西本氏経営週報『上海』を推奨す」『滬友』(21)，1923.8.
「公人私人」『上海』(549)，1923.9.10.
「一人一言」『滬友』(23)，1924.1.
「書院の反省時代」『滬友』(24)，1924.4.
「改新時代の書院」『滬友』(25)，1924.7.
「遠藤保雄君を憶ふて」『滬友』(25)，1924.7.
「同窓と書院新興の気運」『滬友』(26)，1924.11.
「同窓会員として」『滬友』(27)，1925.3.
「中国に於ける経済的非協同」東亜同文会調査編纂部『支那』16 (8)，1925.8.
「同窓会員として」『滬友』(28)，1925.8.
「媽々鋪子戸籍調べ」『滬友』(28)，1925.8.
東亜同文書院教職員総代坂本義孝「弔辞」「書院近状故手塚教授の追悼法会」『滬友』(29)，1926.2.
東亜同文書院滬友同窓会総代坂本義孝「弔辞」「真島教授逝去」『滬友』(29)，1926.2.
「東西南北集漫言漫録」『滬友』(29)，1926.2.
「五卅事件と米支両国の関係」『支那』17 (8)，1926.8.
「護憲社の性質と事業」東亜同文書院研究部『支那研究』7 (2) (11)，1926.9.
「支那に於ける教育権回収の観測」『支那研究』8 (2) (14)，1927.7.
「英雄出現と馬上統一は果して夢なる乎」『上海』(768)，1928.2.21.
「外人の観たる支那」日華学会『日華学報』(7)，1928.12.
「支那の命運を傍観すべきか」『支那』21 (2)，1930.2.
「青年会は何をしているのか」上海日本人基督教青年会『上海青年』15 (7) 発行人古屋孫次郎，1930.7.
「上海の将来」『支那研究』9 (3) (18)，1930.12.
「中日親和の要諦」『日華学報』(12)，1930.
「満洲問題と日支共存共栄」『上海』(899) 上海雑誌社，1933.5.5.
「対支外交の要諦」『上海』(908)，1933.10.1.
「非常時と我が外交政策」『上海』(913)，1934.1.1.
「門下生の霞山公想い出」『支那』25 (2)，1934.2.
「満洲国に対し大国的寛度を持てよ」『上海』(921) 1934.5.
「支那の安全保障に就いて」『上海』(929)，1934.10.1
「支那の安全保障に就いて (下)」『上海』(932)，1934.11.20.
「日華両国提携に関する基本条件」『上海』(940)，1935.4.5.
「対日態度に関する支那言論界の趨向」『上海』(940)，1935.4.5.
坂本義孝 (訳)「支那の対日言論；一、密勒氏評論報：二、中国評論週報：三、民国週刊」『上海』(941)，1935.5.1.
「潜行式排日を根絶し得るや」『支那』26 (8)，1935.8.
滬友同窓会総代坂本義孝代読「滬友同窓会の祭詞」「靖亜神社鎮座祭式典」『支那』26 (12)，1935.12.
「根津先生十三回忌法要並に追悼晩餐及座談会」『支那』30 (3)，1939.3.
「興亜政策の難易弁」『支那』30 (5)，1939.5.
「時局収拾に関する示唆」『支那』30 (12)，1939.12.

インタビュー「燎原の火の如き民族精神」1942.3（木村英夫『民族の咆哮秘録・聖戦と皇軍その実態』雲母書房，1995）.

1 近衛篤麿．号は霞山（1863-1904）．経済・文化・政治など多方面にわたって啓蒙的活動を行う．ヨーロッパ留学経験をふまえ日中提携こそアジアの平和安定につながると考え，東亜同文会を主催した．

2 荒尾精．または義行，号は東方斎（1859-1896）．尾張の人．陸士旧五期生．漢口を中心に情報収集活動を行い，退役後，上海に日清貿易研究所を開設した．

3 根津一．号は山洲（1860-1927）．甲斐の人．陸士旧四期生．陸大三期生（中退）．日清貿易研究所の運営にたずさわり，後に東亜同文会幹事兼東亜同文書院院長となった．

4 坂本義孝（1884-1946）．福島県生まれ．営口税関勤務を経てアメリカで15年間生活し，南カリフォルニア大学東洋科教授をつとめた．国際政治学・平和学者坂本義和（東大名誉教授・国際基督教大学平和研究所顧問）は次男．

5 聖約翰大学．1879-1952．上海にあったアメリカ聖公会系の大学．戦前における中国を代表する名門校．

6 聖書研究会参加者数は，池田鮮『曇り日の虹上海日本人YMCA40年史』（上海日本人YMCA40年史刊行会 1995，pp.9-10）及び後掲資料①②にもとづく．入学者数は佐々木享「東亜同文書院入学者の群像」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報』VOL.11，2003，p.10）に，卒業者数は『東亜同文書院大学史』（滬友会，1982，p.84）にもとづく．

7 神愛館．イギリス人ミス・スミス主催の上海に住む日本人キリスト教信者のための教会．

8 坂本義孝「改新時代の書院」『滬友』(25)，1924，p.18.

9 坂本義孝「書院の反省時代」『滬友』(24)，1924，p.11.

10『東亜同文会関係雑件』第一～六巻，『東亜同文会関係雑件／補助関係』第一～三巻（外務省外交史料館所蔵）をもとに作成．1920-1926，1928分は各年次決算書の値．1919分は1920年分予算書内記述，1927分は予算書の値．

11 Robert E Lewis "*Report Letter Development in Shanghai*" Shanghai: The International Committee of YMCA,1901. University of Minnesota Libraries Kautz Family YMCA Archives. 〔〕内補記，訳は引用者．

12 D. Willard Lyon, "*Report of D. Willard Lyon for the Year Ending September 30, 1903*" Shanghai: Shanghai YMCA,1903. University of Minnesota Libraries Kautz Family YMCA Archives.

東亜同文書院・坂本義孝・上海居留日本人キリスト教関連年表

年次	東亜同文書院関係	坂本義孝関係（年齢）	上海居留日本人キリスト教関係	その他
1871 明治 4				1 ドイツ帝国成立 7 日清修好条規 9 断髪
1875 明治 8				上海東本願寺別院 5 樺太千島交換条約
1876 明治 9				三井洋行上海支店開設 3 廃刀令
1877 明治 10	根津一（17）陸軍教導団入団			西南の役
1878 明治 11	荒尾精（19）陸軍教導団入団			
1879 明治 12	根津（19）士官学校入学（陸士旧 4 期）			エジソン電灯発明
1880 明治 13	荒尾（21）士官学校入学（陸士旧 5 期） 岸田吟香（47）上海楽善堂支店開設			
1881 明治 14				板垣退助（44）自由党結成
1882 明治 15	荒尾（23）士官学校卒業 岸田（49）古典の袖珍本刊行			
1883 明治 16	荒尾（24）熊本鎮台で御幡雅文（24）と交流 7 根津（23）士官学校卒業			11 鹿鳴館開館
1884 明治 17 光緒 10		5.15 福島県岩城郡内郷村小島（現いわき市）に生まれる		清仏戦争（～ 1885）
1885 明治 18 光緒 11	荒尾（26）参謀本部支那課勤務 2 根津（25）陸軍大学校入学 4 近衛篤麿欧州留学（～ 1890.9）	(1)		
1886 明治 19 光緒 12	4 陸軍将校荒尾（27）漢口楽善堂設立 根津（26）メッケルと対立し論旨退学	(2)		1 帝国大学令公布 4 日本、師範学校、小学校、中学校令公布
1887 明治 20 光緒 13		(3)		
1888 明治 21 光緒 14		(4)		日本郵船上海支店開設
1889 明治 22 光緒 15	2 根津（29）参謀本部勤務 4 荒尾（30）帰国、陸軍退役	(5)	宣教師エドワード・エバンス（米国）上海共同租界虹口で邦人に伝道開始在留邦人信者約 100 名英語聖書研究会と礼拝、出席約 15 名程度	2 大日本帝国憲法発布 5-6 田岡嶺雲、上海東文学社講師就任
1890 明治 23 光緒 16	5 根津（30）陸軍予備役 7 根津、漢口楽善堂へ 9 荒尾(31) 上海に日清貿易研究所開設(学生 150 名) 11 根津、研究所代理所長就任	(6)		10 教育勅語発布 11 第 1 回帝国議会
1891 明治 24 光緒 17		(7)	同志社神学部卒業上田上海着集会所を武昌路にうつす	日本綿糸、中国進出 シベリア鉄道起工
1892 明治 25 光緒 18	8· 研究所編『清国通商総覧』	(8)		
1893 明治 26 光緒 19	6 日清貿易研究所卒業式（卒業生 89 名） 7 日清商品上海陳列所 12 根津（33）満洲・視察後帰国、京都南禅寺近くに隠棲	(9)		横浜正金銀行上海支店開設
1894 明治 27 光緒 20	7 根津（34）参謀本部復職し 9 月迄上海密航諜報活動、荒尾（35）京都若王子に隠棲 8 日清商品上海陳列所閉鎖（日清貿易研究所解散） 10 根津第 2 軍参謀として中国上陸、後少佐	(10)	日清戦争のため上海在留邦人帰国、エバンス伝道中止	7 日清戦争はじまる 11 孫文（28）興中会結成
1895 明治 28 光緒 21	10 根津（35）退役、京都隠棲	(11)	エバンス宅で伝道再開	4 下関条約締結 10 孫文（29）広州挙兵
1896 明治 29 光緒 22	近衛（33）貴族院議長就任 7 根津（36）、京都若王子に隠棲、荒尾（37）媒酌で同志社女子教師藤居あい（29）と結婚 10 台北で荒尾没	(12)		孫文（30）ロンドン清国公使館に監禁される
1897 明治 30 光緒 23	4 犬養毅（42）ら東亜会結成	(13)		2 商務印書館設立
1898 明治 31 光緒 24	6 同文会結成 11 東亜同文会成立	(14)		6 戊戌変法 9 戊戌の変

1899 明治 32 光緒 25	4 東亜同文会会長近衛（36）欧米視察出発 10 近衛、劉坤一・張之洞と会談 11 近衛、根津（39）会談	(15)	エバンス帰国、後任にワット（英人）	2 日本、中学校令改正、高等女学校、実業学校令公布 3 日本、文官任用令改正 5 義和団蜂起 日本領事裁判権撤廃
1900 明治 33 光緒 26	3 南京同文書院開校 5 根津（40）上京し東亜同文会評議員・院長就任、近衛代理として渡清し両江総督劉坤一と会談 7 根津帰国、院長代理・監督田鍋安之助（36）渡清 8 南京同文書院、上海にうつる 9 近衛（37）、国民同盟会結成	(16)	聖書研究会参加者 300 ～ 400 人	6 清国、列強諸国に宣戦布告 8 八カ国連合軍北京占領
1901 明治 34 光緒 27	2 東京同文書院 5 上海高昌廟桂墅里で東亜同文書院開校、政治科・商務科（春期入学・3 年制） 上海ＹＭＣＡ協力主事ハネックス、英語担当、学生有志に聖書研究指導、常時 25 名参加 7 近衛（38）北京視察 8 聖書研究会、2 クラス 45 名参加、学外で活動	福島県立磐城中学（現磐城高校）第 1 期卒業 5 東亜同文書院第 1 期商務科入学（17）		
1902 明治 35 光緒 28	ハネックス聖書研究会、常時 35 名参加 4 杉浦重剛（47）院長就任 8 第 1 期生中国旅行	(18)		日英同盟 12 日本紡績業の中国進出
1903 明治 36 光緒 29	聖書研究会、常時 25 名参加 3 ハネックス退職 5 根津（43）院長就任 8 第 3 期生（以降 8 月入学）、近衛（40）対露同志会結成 9D.W. ライアン聖書研究会、30 ～ 40 名参加、学内で活動	(19)	7 日本 YMCA 同盟成立	東清鉄道完成
1904 明治 37 光緒 30	1 近衛没（41） 聖書研究会、75 ～ 91 名参加 聖書研究会が営口日本ＹＭＣＡ慰問金品送付参加 5 聖約翰大学と野球試合	3 東亜同文書院第 1 期商務科卒業、営口税関就職（20）	C.M. マイアーズ、長崎東山学院から来任、聖書研究会引き継ぐ 上海居留邦人キリスト教信者、営口に設置された日本ＹＭＣＡへ慰問金品送る	2 日露戦争はじまる
1905 明治 38 光緒 31	6 卒業生に学士称号，聖約翰大学と野球試合	(21)		シベリア鉄道完成 8 東京で中国革命同盟会結成 9 ポーツマス条約締結科挙廃止
1906 明治 39 光緒 32	4 イギリス陸軍大尉カートン見学 5 聖約翰大学と野球試合 日本ＹＭＣＡ同盟主事大塚素講演 12『支那経済全書』刊行	(22)	日本ＹＭＣＡ主事大塚素、同協力主事Ｇ・フィッシャー上海中国ＹＭＣＡ訪問 C.M. マイアーズ集会 20 名参加	上海西本願寺別院開設 11 南満洲鉄道創立
1907 明治 40 光緒 33	第 1 回大旅行（外務省より 3 年 3 万円補助） 夏コレラ流行	(23)	4.5 上海日本人ＹＭＣＡ成立（乍浦路 40 号）	5 恵州起義
1908 明治 41 光緒 34	1 犬養（53）来校 9H. マイアーズ講師就任 10 明治天皇より御下賜金 11 鍋島直大（62）、清浦奎吾（58）来校	5 アメリカ在住，住所 219JacksonSt. Los-Angeles（24）	上海日本人ＹＭＣＡ夜学生 130 名登録、聖書研究会 3 班、機関誌 1,000 部、会員 40 名	沪杭線開通 台湾縦貫線開通
1909 明治 42 宣統元	8 マイアーズ退職、第 9 期生より宮城拝観開始	(25)	上海日本人ＹＭＣＡ正会員 30、準会員 140、聖書研究会 12 班、月報 1,000 部、夜学生 110、公開講演毎回満席	8 韓国併合 10 伊藤博文暗殺（68） 滬寧（上海南京）線開通
1910 明治 43 宣統 2	9 マイアーズ講師就任	(26)	上海日本人ＹＭＣＡ、会報を『旭光』と改題	8 韓国併合 10 大逆事件
1911 明治 44 宣統 3	4 東郷平八郎（63）、乃木希典（62）来校	アメリカ在住（27）		2 日本関税自主権確立 4 清華学堂（後清華大学）開校 10 辛亥革命
1912 明治 45 大正元 民国 1		(28)	上海日本人ＹＭＣＡ『旭光』を「上海評論」と改題 上海日本人ＹＭＣＡ会館、崑山花園 22 号ミッション・ビルへ移転、25 名収容宿舎、食堂、浴室、正会員 82、準会員 111、夜学校 98	1 南京に中華民国成立 2 袁世凱（53）臨時大総統 7 明治天皇崩御（62）、大正天皇（33）即位 纏足・弁髪禁止令
1913 大正 2	7 高昌廟桂墅里校舎焼失、長崎仮校舎 10 マイアーズ退職、上海復帰赫司克而仮校舎へ	(29)	上海日本人ＹＭＣＡ、理事 10、終身会員 7、維持会員 119、普通会員 83、事務室 1 4 上海日本人ＹＭＣＡ、上海商業学校開設 9 日本基督教会の指導をうけ，YMCA から協会活動を分離，上海日本人基督教会とする	7 第 2 革命 10 日本，中華民国承認
1914 大正 3	6『華語萃編』 9 農工科設置	(30)	10 内山完造（29）ＹＭＣＡ集会参加	7 第一次世界大戦はじまる 8 パナマ運河開通

1915 大正4	学生YMCA結成	(31)	8上海日本人ＹＭＣＡ機関誌『上海青年』創刊	1対華21カ条要求 7朝鮮総督府私立学校改正規則公布、キリスト教教育制限
1916 大正5		南カリフォルニア大学（USC）東洋科教授，住所216w23rdSt. LosAngeles（32）	内山（31）上海日本人YMCA入会	アインシュタイン（37） 一般相対性原理発表 6袁世凱没（57）
1917 大正6	4徐家匯虹橋路校舎竣工、日本YMCA名誉主事フィッシャー、京都YMCA総主事村上正次講演 5日本メソジスト教会監督平岩愃保講演 『支那省別全誌』刊行	(33)	4日本YMCA名誉主事フィッシャー、京都YMCA総主事村上正次来訪 5同志社社長原田助、日本メソジスト教会監督平岩愃保来訪 北米ＹＭＣＡ同盟へ上海日本人YMCA会館建設援助依頼	中国、新文化運動はじまる 内山書店開店（靶盛里） 3ロシア2月革命 11ロシア10月革命
1918 大正7	外務省より中華学生部設置命令、 10支那研究部設置（学内研究所）、学生自治会成立	(34)		8シベリア出兵、米騒動
1919 大正8		第1回国際労働総会（ILO）日本政府代表補佐（ワシントン）（35）		1パリ講和会議 五四運動
1920 大正9	4農工科学生募集停止 9中華学生部設置	(36)		1国際連盟成立
1921 大正10	4第21期生（以降4月入学・4年制） 6政治科廃止 7専門学校令適用、外務省所管 12天津同文書院中学部（後中日学院～敗戦迄）	8東亜同文書院教授就任（37）		7中国共産党成立 12日英同盟廃棄
1922 大正11 民国11	2東亜同文会、財団法人化 3漢口同文書院中学部（後江漢中学校） 東京同文書院閉校	4清華大学での世界基督教学生同盟大会（WSCF）参加 11第4回ILO総会参加（ジュネーブ）（38）	上海日本人ＹＭＣＡ前田主事、来滬中のアインシュタイン（43）を案内	7日本共産党成立 12ソビエト社会主義共和国成立
1923 大正12	3根津（63）院長退任、大津麟平（58）院長就任	エルサレム訪問 夏南京で林出賢次郎（41）、東京で東亜同文会会長牧野伸顕（62）、同副会長近衛文麿（32）と会談 10外務省及協調会の依頼をうけ、第5回ILO総会に参加（ジュネーブ）（39）		5外務省に対支文化事務局（後文化事業部） 9関東大震災 11長崎丸（神戸長崎上海）就航
1924 大正13	東亜同文書院維持会成立 タゴール（63）来校	1ベネチア滞在（40）		内山書店拡大（文化サロン的存在となる） 3日本共産党解党決議 11第1次国共合作
1925 大正14	9代議士一宮房治郎、中野正剛（39）、大内暢三（51）講演、国際連盟協力理事兼慶応大学総長林毅陸（53）講演	夏大磯静養、学生と日光中禅寺湖・富士山登山、国際連盟協会で講演、福島県平町（現いわき市）で講演 12中華学生部長就任（41）		1日本ラジオ放送はじまる 3孫文没（59） 五・三〇事件
1926 大正15 昭和元 民国15	5近衛文麿（35）院長就任 10近衛来校	夏満洲研究旅行（42）		7蒋介石（39）北伐開始 12大正天皇崩御（47）、昭和天皇（25）即位
1927 昭和2 民国16	2根津一没（67） 12胡適（36）特別講義	3.26上海日本人YMCA理事長として上海商業学校第12期卒業式参加 5東亜同文書院就職委員 6.24-7.20東亜同文書院中華学生部日本見学旅行引率（43）		四・一七クーデター 魯迅上海にうつる
1928 昭和3 民国17	1学校バス虹口運行 11日中学生同居許可 12殷汝耕（43）講演	上海日本人ＹＭＣＡ理事長（44）	4上海日本人YMCA上海商業学校が外国語学校へと改組	4第2次北伐開始 6北伐軍北京入城張作霖爆殺（53）
1929 昭和4 民国18	4陳彬龢特別講義 6犬養（74）、頭山満（74）講演	(45)		内山書店北四川路底に移転 10世界恐慌はじまる
1930 昭和5 民国19	5『山洲根津先生伝』 9中華学生部新規学生募集停止 11学生ストライキ 12第1次学生検挙事件（反戦ビラ配布事件）	4上海日本人ＹＭＣＡ理事長、同外国語学校長（46）	4上海日本人YMCA外国語学校英語上海語143名、新入会員43名 5.23上海日本人YMCA第1回理事会内山（45）講演部長	
1931 昭和6 民国20	1大内暢三（57）院長代理就任 4魯迅（50）特別講義 12大内院長就任	3.16東亜同文書院退職 10太平洋問題会議に新渡戸稲造（69）らと参加 11上海日本人YMCA理事長・同会館教育部講師英語主任（47）		9上海自然科学研究所開設、柳条湖事件
1932 昭和7 民国21	2第1次上海事変を避けて長崎引き揚げ 4上海復帰	上海日本人YMCA理事長（48）	3停戦後、上海日本人YMCA会館、上海事変日本軍陸戦隊慰問場設置 上海日本人YMCA会館で魯迅木版画展	1第1次上海事変 3満洲国建国宣言 4上海新公園テロ事件 五・一五事件、犬養毅総理暗殺

1933 昭和 8 民国 22	3 第 2 次学生検挙事件 4 芳沢謙吉外務大臣講演 11 上海日本人倶楽部で「大旅行」学生撮影映画会	6 対支文化事業部長坪上貞二に聖約翰大学教授洪水星補助依頼（49）		3 日本国際連盟脱退
1934 昭和 9 民国 23	3 最後の中国人学生卒業	上海日本人ＹＭＣＡ理事・学校長秋までに帰国か？（50）	2 上海日本人 YMCA で朝鮮人会親睦会 6 上海日本人 YMCA 会館内に上海朝鮮人会事務所及び幼稚園を設置 10 上海日本人ＹＭＣＡ理事長乾精末	3 満州国帝政 10 中共長征（～ 1936.10）
1935 昭和 10 民国 24	11 靖亜神社（祭神近衛篤麿・荒尾精・根津一）	在日スイス公使館顧問？（51）		2 美濃部達吉（62）天皇機関説 中国共産党抗日救国宣言（八一宣言） 12 大本教主不敬罪
1936 昭和 11 民国 25		（52）		二・二六事件 10 魯迅没（55）
1937 昭和 12 民国 26	江漢中学校、中日学院へ吸収 8 徐家匯虹橋路校舎接収 9 学生志願従軍開始 10 長崎仮校舎 11 徐家匯虹橋路校舎焼失	（53）		6 第 1 次近衛（46）内閣 7 日中戦争はじまる 8.13 第二次上海事変 12 日本軍上海南京占領
1938 昭和 13 民国 27	2.2 程模洵講師自殺 4 上海復帰、徐家匯海格路仮校舎（交通大学校舎）	（54）	上海日本人ＹＭＣＡ理事長乾精末	1 近衛（47）声明（国民政府を対手にせず」
1939 昭和 14 民国 28	2 近衛文隆（24）学生主事就任 4 大学昇格	（55）		3 ノモンハン事件 12 朝鮮創氏改名
1940 昭和 15 民国 29	9 矢田七太郎（59）学長就任	3 東亜同文会定例講演会出席 6 東亜同文会定例講演会出席（56）		3 汪兆銘（57）南京政府 7 第 2 次近衛（49）内 9 日独伊軍事同盟
1941 昭和 16 民国 30	『新修支那省別全誌』刊行	（57）	上海日本人ＹＭＣＡ理事長川口憲一	7 第 3 次近衛（50）内閣 10 東条英機（57）内閣、ゾルゲ事件 12 太平洋戦争はじまる
1942 昭和 17 民国 31	10 上海に東亜工業学院開校	太平洋戦争開戦後に上海へ、上海市政研究会勤務 3 外務省嘱託として岡崎事務所（外務省機関）勤務（58）	上海日本人ＹＭＣＡ理事長川口憲一	11 大東亜省設置
1943 昭和 18 民国 32	4 付属専門部設置（滬江大学校舎）、北京工業専門学校開校 12 学徒出陣	6 聖約翰大学教授（59）		1 英米、国民政府と租界廃止条約 6 日本、汪政権に租界返還
1944 昭和 19 民国 33	2 本間喜一（53）学長就任	（60）	6 上海日本人ＹＭＣＡ理事長内山（59）	
1945 昭和 20 民国 34	北京経済専門学校開校 5 富山県呉羽分校 9 徐家匯海格路仮校舎接収 11 呉羽分校閉鎖	3 聖約翰大学退職 5 帰国 敗戦後上海に渡る（61）		5 ドイツ無条件降伏 8 日本無条件降伏
1946 昭和 21 民国 35	3 東亜同文会解散 4 学生・教職員帰国	3.27 帰国 5.6 没（62）	4 上海日本人 YMCA 活動終了	

注：人名（数字）、数字は年齢。